

三重県齋宮跡調査事務所年報1979

史 跡 齋 宮 跡

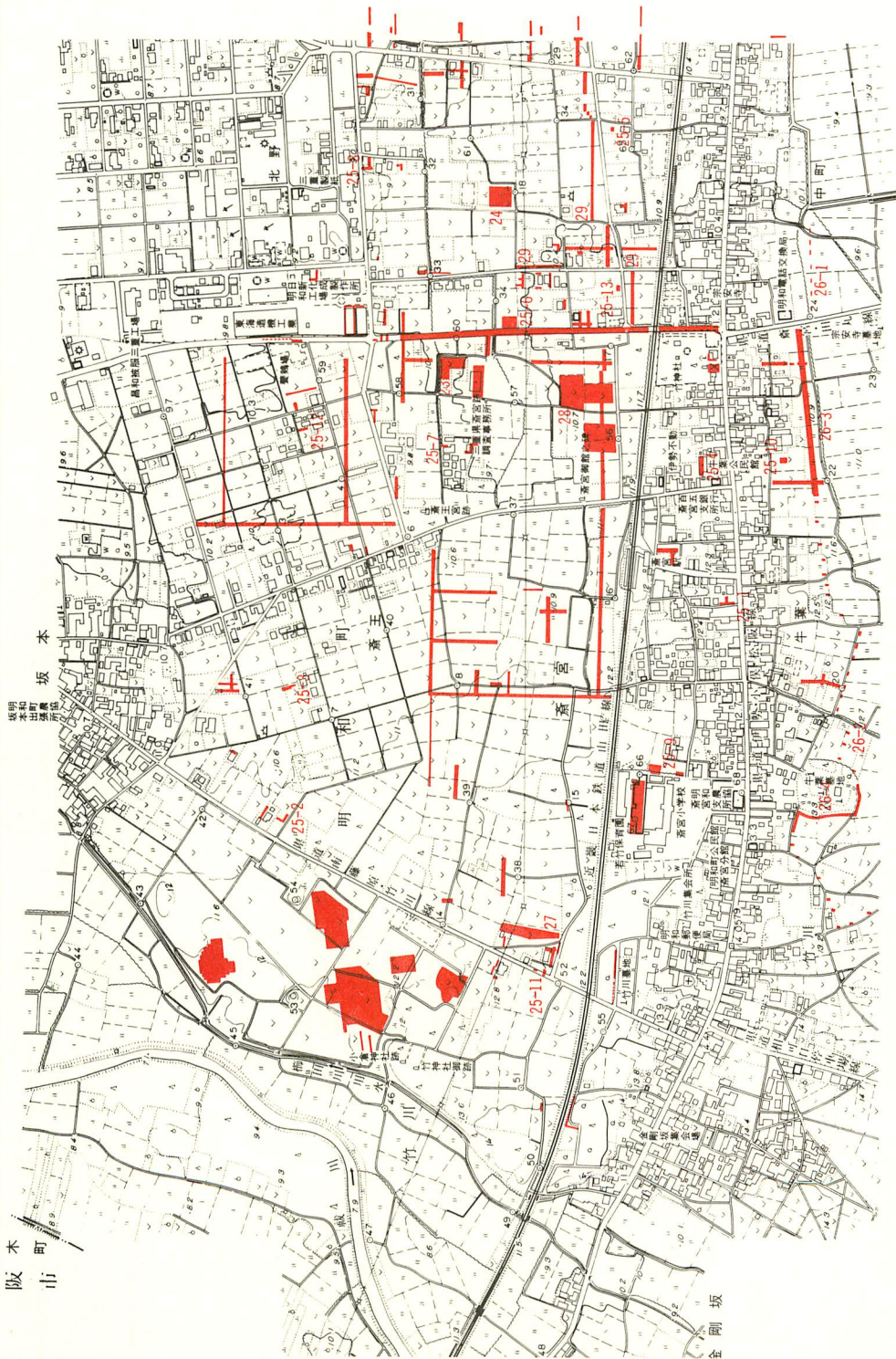
— 発掘調査概報 —

昭和55年 3 月

三重県教育委員会
三重県齋宮跡調査事務所

昭和54年度発掘調査地区

高木町
松阪市



年報創刊にあたって

齋宮跡は7世紀後半の天武朝から南北朝にかけて、約660年間存続したと言われ、古代中世の政治、経済、文化等を解明する上で重要な遺跡であります。

このため、54年3月、国史跡に指定され、史跡の保護、保存のため、同年4月に三重県齋宮跡調査事務所を現地に設置しました。

思えば、昭和44年に民間企業により住宅団地造成が計画され、その事前発掘調査が発端となって、これまで幻の宮として伝承されるにすぎなかった齋宮跡が注目されるようになり、以来10ヵ年の歳月を経て、ここに史跡齋宮跡として保存されようとしていることは非常に喜ばしいことであり、今日に至るまで種々御支援、御協力を賜った皆様方に厚く御礼申し上げる次第でございます。

この意義ある史跡齋宮跡のスタートに際し、ここに三重県齋宮跡調査事務所年報を創刊することは、今後、この齋宮跡の解明、動きを皆様方に順次御報告申し上げ、皆様方と共にこの齋宮跡を適正に保存しようとするものでございます。

齋宮跡の保存の重要性は、今ここで改めて申すまでもないところでございますが、これから文化財の保存については、考古学、歴史学といった一義的な面からの保存のみでなく、80年代を迎え、快適な人間居住環境の確保が強く叫ばれている中で、生産、生活の場の確保と同様、良好な文化的、歴史的な自然環境の確保が重要であることは言うには及ばないところでございます。この意味で、今後、齋宮跡の保存と活用は地元明和町だけのものではなく、また、埋蔵文化財業務に携る者だけでなく、快適な地域づくりの中で広範的にとらえていくことが肝要であると思うのでございます。

最後に、今年度の事業の実施にあたり御協力をいただきました地元の皆様方をはじめ、関係各位の方々に深く感謝いたしますと共に今後ともこの齋宮跡の保存のためにより一層の御指導と御支援を賜りますことを、ここにお願いして創刊の御挨拶とさせていただきます。

昭和55年3月

三重県齋宮跡調査事務所長

竹 林 日 出 夫

目 次

I 調 査 経 過	1
II 第23次調査	3
III 第24次調査	8
IV 第27次調査	13
V 第28次調査	20
VI 第29次調査	29
VII 第25次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）	39
VIII 第26次調査（県営圃場整備事業にともなう現状変更緊急調査）	44
IX 調査事務所要覧	48

例 言

1. 本書は三重県斎宮跡調査事務所が、昭和54年度に斎宮跡において実施した調査の概要と、事務所要覧である。
2. 第Ⅶ章は、明和町教育委員会が調査主体となっておこなった個人住宅新築等の現状変更緊急調査であり、第Ⅷ章は県営圃場整備事業にともなう現状変更調査であるが、発掘調査は当事務所が担当した。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法第6座標系を基準とし、方位の標示は真北（N 5° 40' E）を用いた。
4. 遺構標示記号は次の通りである。
SB；建物 SK；土坑 SD；溝 SE；井戸 SA；柵 SF；土器焼成坑
5. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所長坪井清足氏、椋山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇楨二氏、名古屋大学教授檜崎彰一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
6. 本概報の執筆、編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、竹林日出夫、山沢義貴、大西素行、吉水康夫、倉田直純があたり、野呂美絵子がこれに協力した。

I 調査の経過

昭和54年度の発掘調査は、面的調査として第23次、第24次、第27次、第28次の4次の計画調査と、中町北部のトレンチ調査、県営圃場整備事業に伴う現状変更緊急調査、更に町教育委員会が調査主体となり県斎宮跡調査事務所がこれに協力する個人住宅等新築に伴う現状変更緊急調査等をおこなっている。調査期間は昭和54年5月15日から昭和55年3月12日まで、調査総面積は、11,526㎡である。

計画調査は、宮城中央部の公有化地区内の字下園と字柳原で2ヶ所、調査のおよんでいない東部の字西加座と西部の字東裏の準公有化地区で2ヶ所において面的調査を実施した。また、現状変更希望の多い中町北部の遺構の広がりを見るため、作物の少ない冬期をえらび、トレンチ調査も実施した。

県営圃場整備事業に伴う調査は、宮城南部の水田地帯が対象となったため、水路部分の試掘調査結果にもとずき、遺構の発見された字鈴池を中心に水路と道路敷について面的調査をおこなった。

個人住宅建設に伴う現状変更緊急調査は、13件の申請箇所について調査した。調査地点は宮城全体におよぶが、準公有化地区（C地区）で6ヶ所、準住宅地区（D地区）で7ヶ所であり、平均調査面積は85㎡である。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
23	6AEL-B	840 ㎡	54.5.15— 54.7.5	大字斎宮字下園2813, 2810—4	浦田 勇	計画的面調査
24	6AGF-D	992	54.7.5— 54.8.29	大字斎宮字西加座2703, 2704, 2705, 2459	山上 寛 西出秀子	〃
25-1	6ADP-K	93	54.6.5— 54.6.20	大字斎宮字牛葉3029— 1	有限会社 三重土地ホーム	住宅開発にとも なう事前調査
25-2	6ACA-Y	75	54.7.19— 54.7.25	大字斎宮字古里3270	脇田 悦生	個人住宅にとも なう事前調査
25-3	6ADD-F	59	54.8.6— 54.8.11	大字斎宮字篠林3139— 3	池田幸雄	〃

第1表 昭和54年度発掘調査地区一覧表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
25-4	6AER-H	99 m ²	54.8.13- 54.8.31	大字齋宮字牛葉3014	牛場公民館	公民館建設にともなう事前調査
25-5	6AGN-H	35	54.9.10- 54.9.15	大字齋宮字鍛冶山2392	丸山貴生	個人住宅にともなう事前調査
25-6	6AFH-A	240	54.10.16- 54.11.5	大字齋宮字西加座2675-5	谷口龍治	〃
25-7	6AEK-V	24	54.12.19- 54.12.24	大字齋宮字下園2926-10	奥田悦夫	〃
25-8	6AFC-E	48	55.1.9- 55.1.18	大字齋宮字西前沖2064-5	山本幹男	〃
25-9	6ACN-C	216	55.1.11- 55.1.24	大字齋宮字広頭3387-1	北出 勝	〃
25-10	6AEV-A	83	55.1.24- 55.2.26	大字齋宮字鈴池339-1	永島 春	〃
25-11	6ACF-B	37	55.2.20- 55.2.26	大字竹川字東裏364-1	沢 一夫	〃
25-12	6AEE-Y	20	55.2.25- 55.3.3	大字齋宮字楽殿2892-3	山本道男	〃
25-13	6AFJ-E	60	55.2.28- 55.3.5	大字齋宮字西加座2766-1	山内 充	〃
26-1	6AFR	54	55.7.24- 55.7.25	大字齋宮字中西		齋宮地区県営圃場整備事業にともなう試掘調査
26-2	6AEX ~ 6ACQ	550	55.10.12- 55.10.27	大字齋宮字鈴池, 木葉山, 南裏		〃
26-3	6AEV.W. X	1,890	54.11.1- 54.12.12	大字齋宮字鈴池		齋宮地区県営圃場整備事業にともなう発掘調査
26-4	6ACR	385	54.11.26- 55.2.2	大字齋宮字木葉山, 大字竹川字南裏		〃
27	6ACG-S.T	2,350	54.8.30- 54.11.26	大字竹川字東裏329-2他	辻仁兵衛他	計画的な面調査
28	6AEO-D	1,420	54.12.8- 55.3.10	大字齋宮字柳原2799, 2800	松本貞文他	〃
29	6AFL ~ 6AGK	1,956	54.12.7- 55.3.10	大字齋宮字鍛冶山他	七林貞次他	計画的なトレンチ調査

第1表 昭和54年度発掘調査地区一覧表

II 第 23 次 調 査

6 AEL-B (下園地区)

調査区は斎宮跡調査事務所の北側部分にあたり、北で字楽殿、東で字西加座に接する。調査区の北で接続する O トレンチでは、楽殿と下園との字界を東西に走る古道と考えられる遺構ならびにこれにとり付く側溝が見つかっており、又広域圏道路部分や調査事務所敷地部分でも、建物を区画すると思われる平安時代前半頃の溝が検出されている。今回の調査区がこれらの遺構とどういった関連をもつのかということが、主要な調査目的の一つであった。

遺構の検出される地山面までは、表土下平均約20cmと浅いうえに、遺物包含層は草木の根などにより、かなり攪乱されており、層位的な調査は不可能であった。調査の結果、掘立柱建物 22棟、土壇20、溝 4 条を検出した。遺構の時期については、主として遺構の切り合い関係及び遺構内出土遺物から判断し、奈良時代、平安時代前半、中葉、後半、末葉の 5 期に分けた。

奈良時代の遺構

S K1156のみ奈良時代の土壇とした。径90cm、深さ28cmでほぼ円形。土師器鉢、杯、皿の 3 点のみがほぼ完形で出土した。

平安時代前半の遺構

掘立柱建物 S B1160、S B1170、土壇 S K1184、S K1174がある。

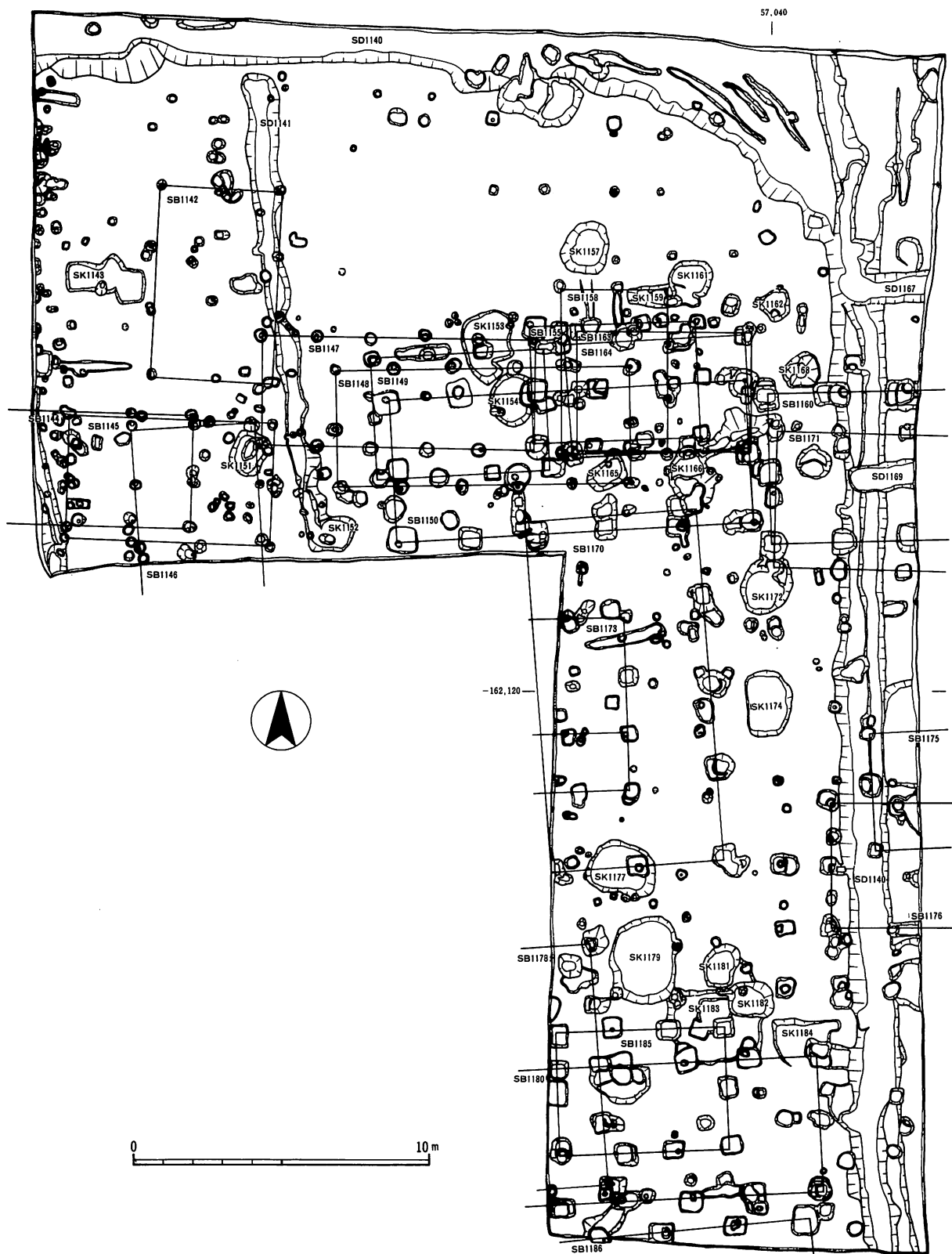
S B1170は 4 間×2 間、柱間10尺等間の南北棟建物である。東側柱列では、いずれも柱抜き取り穴がみとめられた。S B1160は 3 間以上×2 間、柱間約 8 尺等間の東西棟建物で、調査区の東へ続く。柱掘方の底部付近では埋土として暗褐色土粒混入青灰色粘質土が厚さ10数cmほどつき固められていた。

S K1184は深さ10cmの浅いもので、かなり形が崩れている。埋土内より土師器杯、皿、甕、高杯、須恵器杯、甕が出土。S K1174はほぼ垂直に掘られた土壇で底部は平坦。深さ67cmを測る。遺物はほとんど出土していない。

平安時代中葉の遺構

掘立柱建物 7 棟、土壇 6 がある。掘立柱建物は調査区北部で 5 棟、南部で 2 棟の重複がみとめられた。

北部の S B1150は 5 間×2 間、柱間約 8 尺等間の東西棟建物で、平安時代中葉の建物の中で最も古く規模も大きい。平安時代前半とした S B1160に次ぐ建物と考えられる。四隅の柱穴には柱痕跡が残っており、柱の太さは約20cmである。以後、柱穴埋土の切り合い関係において



第1図 第23次遺構実測図 (1 : 200)

多少矛盾する箇所がみとめられたものの、S B1164→S B1163、さらに若干場所を西へ移して、S B1155あるいはS B1149への変遷がたどれる。いずれも3間×2間、桁行5.6m～6.1m、梁行3.8m～4.1mのほぼ同規模程度の建物であり、同一機能をもった建物の建て替えと考えられる。調査区南部のS B1180は5間×2間の東西棟建物で、北部のどの建物と対応するのかは目下不明。S B1185は北部のS B1155と規模や棟方向がほぼ一致しており、南北軸線上に約20mの間隔を置いて並置するところから同時期の建物と考えられる。

土壇は南部にS K1143、S K1157、S K1166がある。形態、大きさとも様々であるが、深さは20cm前後である。出土遺物は土師器杯、皿、甕が大半で若干須恵器片、灰釉陶器片が混じる。S K1157からは多量の志摩式製塩土器が出土した。

平安時代後半の遺構

掘立柱建物4棟、土壇3がある。

S B1148は5間×2間の東西棟建物で、柱掘方は径40cm前後の円形である。S B1150とは桁行で2.1m、梁行で0.9mほど小さい。S B1158は3間×2間の南北棟建物。S B1171は3間以上×2間で、調査区の東へ続く。

調査区南部のS B1178は4間×(2)間の南北棟建物で、柱掘方は一辺70cm前後、深さ57cm～75cmを測る。柱掘方の底部近くには、埋土に混じって拳大の根固め石がそれぞれ4個～10個みとめられた。平安時代後半の建物としたが若干時期的に遡る可能性がある。ただしS B1180よりは新しい。

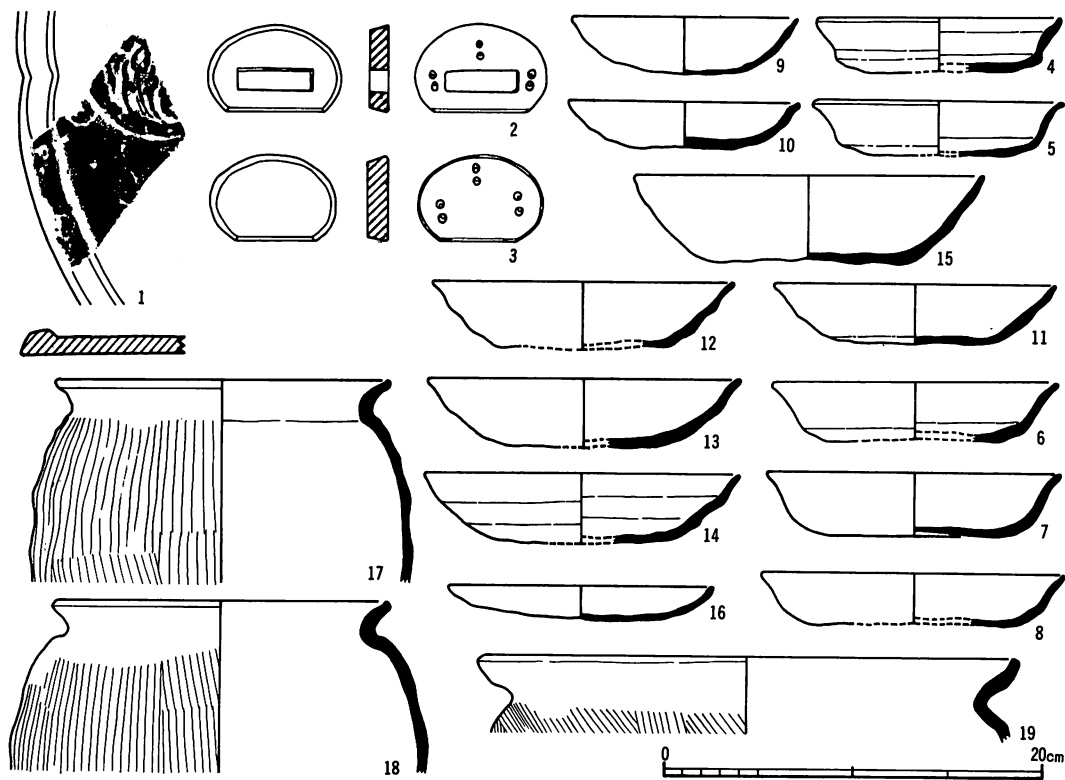
土壇は調査区の北部に、S K1153、S K1159、S K1161が集中している。出土遺物は土師器の細片が大半を占める。S K1161からは緑釉段皿、灰釉皿が伴出した。

平安時代末葉の遺構

掘立柱建物5棟、溝1条がある。掘立柱建物は調査区の北西部に集中しており、柱掘方はすべて径40cm前後の円形で、柱間は6尺～7尺である。S B1147は5間×2間の東西棟建物で、後半のS B1148よりやや規模が小さい。S B1148の建て替えと考えられる。S B1145は3間×2間の東西棟建物で、3間×2間の南北棟建物S B1142と東でほぼ柱通りを揃える。S B1144より新しく、これの建て替えと考えられる。S B1144、S B1146は3間以上×2間の建物で、それぞれ調査区の西と南へ続く。

S K1151はS B1147の南西隅柱穴と切り合い、S K1151の方が新しい。土師器小皿、台付皿、甕、灰釉碗が出土。S K1152では、同様な土器のほか、緑釉片、山茶碗片も出土。

S D1140は東西溝と緩やかなカーブを描きながら連結する南北溝から成るもので、平安時代後半のS B1171廃絶以後掘られ、平安時代末頃から鎌倉時代初頭にかけて一気に埋められた溝と考えられる。南北溝で幅1.6m、深さ30cm～50cmを測り、調査区北西隅で浅く、南北溝の東側



第2図 第23次出土遺物 包含層、1 S B1155、2・3 S K1179、4～19

半分を一段深く掘っている箇所が一番低い。調査区の北東隅は全体的に低く、又南北溝の東側遺構面は西側に比べて10数cm低い。南北溝はN 2° Wの方向で流れ、第18—2次調査で見つかったS D922 に連ながるようである。この溝は現在の字界と一致しており、何らかの区画溝と考えられる。

S D1167、S D1169は調査区東へ延びる東西溝で、S D1140より深く掘られているが、その前後関係や時期など明確でない。第10次調査（広域圏道路）では、これらの溝の続きは見つかっていない。

時期不明遺構

遺物が全く出土していないか、あるいは出土しても細片であるため時期の判別ができない遺構がいくつかある。掘立柱建物ではS B1173、S B1175、S B1176、S B1186、土壇ではS K1154、S K1162、S K1168、S K1172、溝ではS D1141、S D1167、S D1169などがある。

遺物

土壇内出土のものが大半で、土師器杯、皿片が多い。概して遺物の保存状況は悪く、形状の窺えるものは少ない。

緑釉陶器は15片出土している。平安時代中葉の建物が集中する箇所若しくはその周辺からの出土が多い。

硯類では円面硯の台脚部が2点、灰釉風字硯が1点ある。いずれも調査区南部の建物集中地区から出土。

土製品には土錘があり、S K 1179、S K 1177から各1点出土。

金属製品、石製品は非常に少なく、わずかにS K 1179から鉄製刀子の一部が、S B 1155の柱穴埋土から石帯2個が出土したにすぎない。石帯はいずれも丸柄で、一つには方形透孔がある。縦幅2.3cm、厚さ5mmと5.5mmで、石材は安山岩質である。

このほかに遺物包含層から唐鏡が出土した。わずかな断片であるが、雙鸞鏡の一部と思われる。

ま と め

わずか 840㎡の小範囲な調査であったが、22棟もの掘立柱建物が検出された。それらの大半が調査区北部と南部に集中しており、特に平安時代中葉以降の建て替え頻度の著しいことが分かった。

今、北部での建物の変遷に目を向けてみると、平安時代中葉に5間×2間の建物から3間×2間の建物に変化し、3回ほど建て替えがあって、後半に再び5間×2間の建物が復活するという過程がたどれる。こうした変化の背景には、様々な歴史的事象を想定せねばならないが、たとえばこれを建物のもつ機能の変質→復活とみるのか、あるいは機能はそのまま、単なる建物の規模の変化とみるのかは、今後の課題としたい。

次に調査区内での建物の棟方向を見てみたい。平安時代前半から中葉にかけては、北に対し西へ2°～3°偏る建物が圧倒的に多く、後半を境として徐々に東へ偏り、末葉では北に対し東へ1°～3°偏る建物が多くなり、棟方向にばらつきが目立つ。こうした傾向は、昨年度調査した御館、柳原地区と若干性格を異にしている。

区画施設としての溝と建物との関係は、今回の調査で明らかにすることはできなかった。今後の面調査に期待したい。

Ⅲ 第 24 次 調 査

6AGF-D（西加座地区）

広域圏道路から史跡指定地の東限に至る、中町地区北部の畑地一帯はこれまでほとんど調査を行う機会が持てず、東限を追求するトレンチや若干の個人住宅建設に伴う事前調査の知見から、少なからぬ遺構があるものと想像されていたものの、その実態はほとんど不明であった。このため当地域一帯の遺構状況を把握することが急務とされていた。今回当地域のほぼ中央付近に荒地となっている畑があるため、これを調査区として設定し、調査を実施した。

調査の結果、検出した遺構は掘立柱建物14棟、土壇11ヶ所、溝等があるが、遺構の状態は比較的単純で、御館、柳原両地区などで見られるような数棟の建物や土壇、溝等が錯綜するような複雑な重なりは少なく、建物の配置などは明瞭であった。

奈良時代の遺構

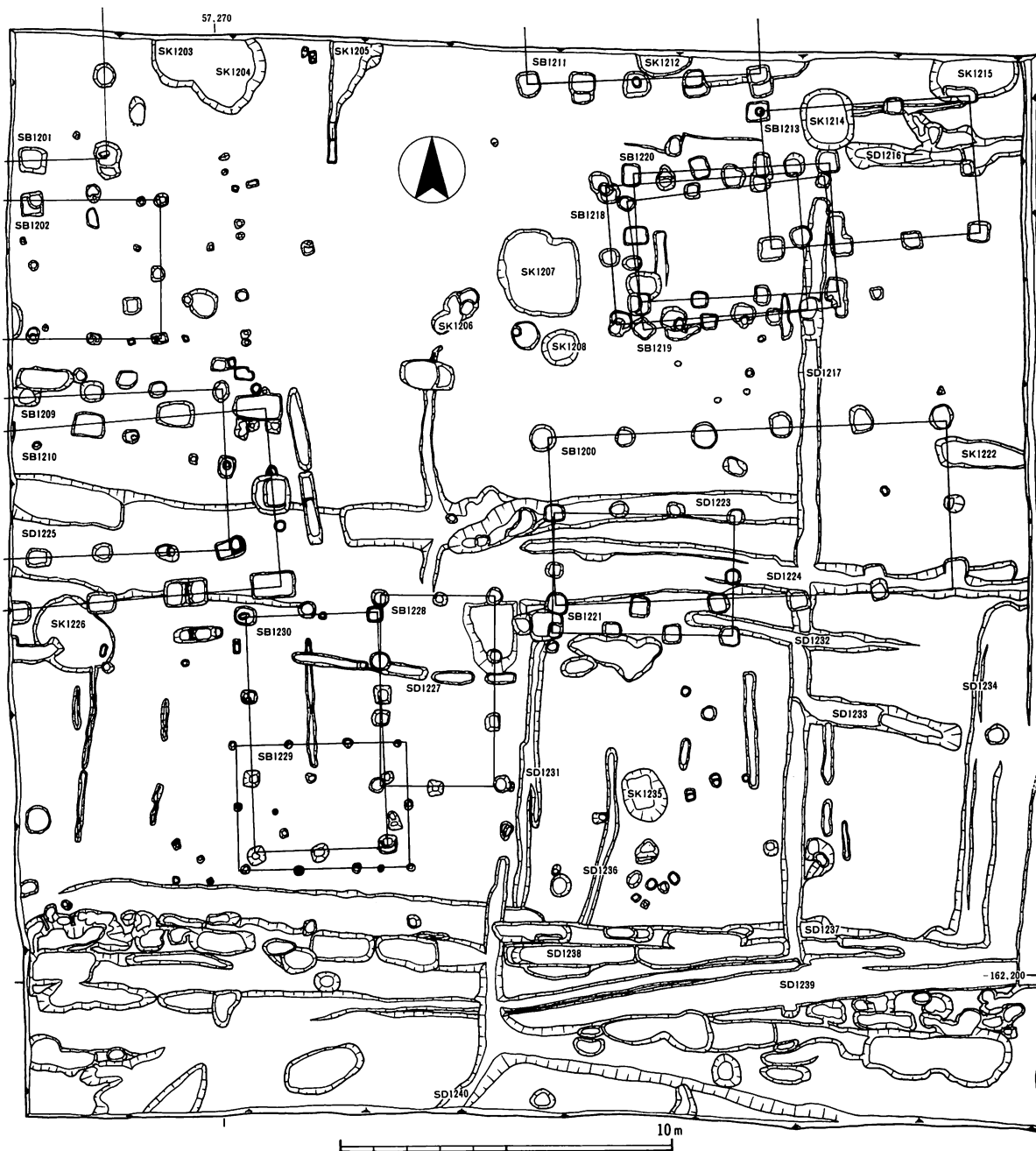
比較的小規模な土壇 2ヶ所を検出した。S K1208は径約 1.1m、深さ約0.85mを測る円形の土壇である。掘り方は整然としたもので、埋没土中より土師器の杯、皿等が完形に近い状態で多数出土した。S K1235は検出面では1.6m×1.2mの楕円形を呈するが、底部では1.0m×0.7mの長方形を呈し、深さ約 1.2mを測る整然とした掘り方をもつ土壇である。出土遺物はS K1208と同様の傾向を示す。いずれも深さのうえでは一段と深いものの、面積では大型の柱穴に近い規模であるが、周囲にこれらと関連すると考えられる遺構は見られない。

平安時代前半の遺構

掘立柱建物10棟、土壇 6ヶ所、溝 2条等を検出した。

S B1210は長辺 1 m前後の長方形を呈する大型の柱掘方をもつ建物で、桁行は調査区外にのびるため不明であるが、本調査区で最大規模の建物である。また調査区の北西隅で検出したS B1201では根石をもつ柱掘方も認められた。調査区北東部では 3 棟の建物（S B1218、S B1219、S B1220）が建て替えと考えられるような状態で重なりあい、さらにS B1213が一部を重複させて検出された。いずれも平安時代前半のものと考えられるため 4 度の建て替えが行なわれたものと考えられる。これらの建物はS B1218は不明であるが、柱掘方の切り合い関係からSB1213→SB1220→SA1219の順であることを確認した。

これらの建物群の南で検出したS B1200は 5 間× 2 間の建物で本調査区では大型の建物である。柱掘方は円形のものと方形を呈するものがあり、不ぞろいでいずれも比較的浅い。これらの柱掘方からの遺物出土は少なく、不明確ではあるが若干の出土土器片や建物配置、遺構の



策3図 第24次遺構実測図 (1 : 200)

切り合い関係等を考慮して一応平安時代前半のものであると判断した。

調査区の南西部で検出した S B 1230 は平安時代前半とした建物の中では唯一の南北棟で、3 間×2 間の建物であるが、梁行方向の柱間に比べて桁行の柱間がやや長く、他の同様規模の建物より桁行方向の長い平面形を示すことが目につく。この建物の柱掘方の一ヶ所は平安時代中葉と考える SB1228 に切られており、この点でも建物の前後関係が示されている。

一方土壇では 6 ヶ所を検出した。平面形は様々であるが、深さはいずれも 15cm～25cm と浅いものが多く、遺物の出土量も比較的少ない。S K 1226 では奈良時代かとも考えられる土器小片が混入していたが、S B 1210 の柱掘方との切りあい関係からこの時期のものと考えた。

また溝では S D 1223 と S D 1236 の 2 条を検出した。S D 1223 は西半部で後出の S D 1225 に切られているため、さらに延長してゆくものかは不明である。S D 1236 は非常に浅く、長さ約 5 m にわたって検出したのみの小規模なもので、遺物の出土量も少ない。

平安時代中葉の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物 4 棟、土壇 2 ヶ所、溝 3 条などである。

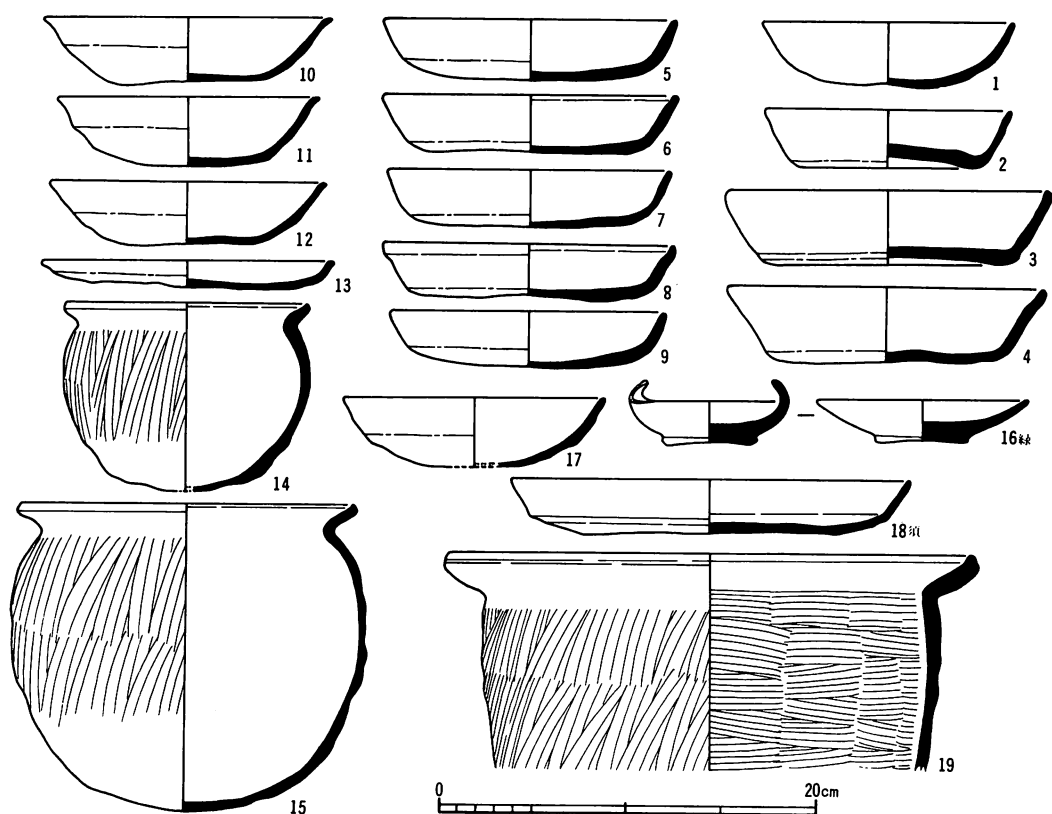
掘立柱建物は、西側の発掘区外へのびる S B 1202 をのぞいていずれも 3 間×2 間で、柱掘方は S B 1202 も含め小規模なものである。ことに SB1229 の柱掘方は直径 30cm たらずのものばかりで、他の 3 棟に比べて特に小さく柱通りもやや不ぞろいである。また棟方向も S B 1229 が E 3° N を示すのに対し他の 3 棟はいずれも E 1° S またはこれに直交する N 1° E を示し、S B 1229 は他の掘立柱建物とは異質の様相を呈している。

土壇は北東隅で 2 ヶ所を検出したのみである。S K 1214 は 1.9 m × 1.6 m の楕円形を呈し、深さ約 25cm を測る。土師器の杯、甕などが完形に近い状態で多数出土しているが、S B 1213 の柱掘方をはじめ他の遺構が重なっているためか、前後する他の時間のものと考えられる遺物が含まれている。

また S K 1215 は発掘区外へのびるため全容は不明であるが、長径約 2.7 m の楕円形を呈するものと考えられる。出土遺物の中に土師器の杯、甕や須恵器の皿とともに土錘の出土していることが特徴といえよう。

溝では調査区東半を南北に貫く S D 1217 を検出した。幅 70cm、深さ 15cm 前後と小規模なものではあるが、S B 1202、S B 1221、S B 1228 などのほぼ同時期と考えられる掘立柱建物と似た方位を示し、平安時代中葉における一時期の小区画を示す溝である可能性も考えられよう。

S D 1239 は調査区南端で一段と深くなり、中近世まで何度も掘りなおされたと考えられる S D 1240 底でかろうじて削り残された状態で検出された溝である。東端でわずかに両肩を確認し約 80cm の溝幅を知り得たのみで全容は不明である。



第4図 第24次出土遺物 S K 1208、1～4 S K 1235、5～9 S K 1214、10～15
S K 1215、16～19

平安時代後半の遺構

土壇2ヶ所と溝1条を検出したのみである。

土壇S K 1203及びS K 1204は調査区北西隅で一部重複して検出し、S K 1204が新しいものであることを確認している。底は両者ともほぼ平坦で続き深さ約20cmを測る。遺物の出土量は少ないがS K 1204から土師器の杯、皿や灰釉陶器碗とともに緑釉陶器の耳皿が出土している。また溝S D 1216は北東隅で検出したものでさらに東へ続くものと考えられる。

鎌倉時代以降の遺構

調査区のほぼ中央で東西溝S D 1225を検出した。深さは5cm～10cmと非常に浅く東部では確認できなかった。遺物の出土量も少なく、わずかにこの時期と判断し得る少片が含まれるのみであった。

南端で検出したS D 1240は底面の凹凸が多く遺物には平安時代から室町・江戸時代にわたる多様な時期の土器片が含まれていた。

遺 物

数ヶ所の土壇にまとまって土器の出土を見たものの、全体として本調査区の遺物の出土は少ない。緑釉陶器の出土もわずか7点を数えるのみである。細片が多いが、S K1204から出土した緑釉耳皿は約 $\frac{1}{3}$ を欠くものの、高台に糸切り痕を残し土師器の杯、皿と共伴するものである。

緑釉陶器の出土点数が少ないことについては、本調査区で検出した遺構の大半が平安時代後半以降の遺構が少ないことによるものとも考えられよう。そのことは前述の耳皿がS K1204から出土した他、S K1203から1点、S D1225の周辺から3点が出土していることから考えられよう。

ま と め

奈良時代と考える2ヶ所の土壇は形状が若干異なり、その間隔も約13mへだてている。しかし、遺物の出土状態や掘り方が比較的ていねいで、深い点など共通する点も見られる。周辺に関連すると思われる遺構は検出されていないが、両者相互に何らかの関連をもった遺構であるとは考えられないであろうか。

本調査区で検出した掘立柱建物14棟のうち10棟までが平安時代前半のものであろうと考えられる。このうち調査区北東部に検出したS B1218、S B1219、S B1220の3棟は一定の場所に固執しているがごとき状態で建て替えられている。3間×2間の小規模な建物であるが他の建物とは異った性格が考えられないであろうか。

また建物の配置のうえでは、これら3棟の南に位置するS B1200はS B1220とE3°Nの同一棟方向を示し、桁行の中心線を同じくして4mの間隔をもつ。またS B1200の南西に位置するS B1230の北側妻柱列は5.5mをへだててS B1200の南側柱列と一直線上に並ぶ。棟方向はS B1200、S B1220と直交するN3°Wを示し、いずれも平安時代前半のものであると考えられることから建物配置の一形態を示すものと思われる。これら3棟の建物配置はさらに東にも1棟存在することも想定できるが、調査区外のため不明である。

本調査区において検出された掘立柱建物は重複が少なく、時期も平安時代前半から中葉に限られる。建物の棟方向は、若干の例外を除いて、平安時代前半ではE6°NとE3°N及びそれぞれに直交するものの2種類が見られ平安時代中葉ではE1°Sとこれに直交するものといった傾向がある。このようなことから本調査区は平安時代前半から中葉にかけての建物配置を把握するうえで貴重な資料となるものであり、斎宮跡の中でも重要な一画を占めるものであるといえよう。

Ⅳ 第 27 次 調 査

6ACG-S・T（東裏地区）

調査区は宮域の西部、字東裏に属し、県道南藤原・竹川線より東へ60mほど入った所に位置する。調査は草木を伐開後、東西約26m、南北約95mの縦に細長い発掘区を設定して行った。本調査区の近辺では、かつて、昭和51年度第13—7次、第13—10次調査（個人住宅等新改築に伴う事前調査）、第12—3次調査（2Cトレンチ）、第16—3次調査（竹川町道Cトレンチ）などで、奈良時代を中心とする遺構、遺物等が検出されており、又北方の古里地区では、奈良時代、鎌倉・室町時代の大溝をはじめ、多数の竪穴住居址、掘立柱建物、土壇等が見つかっており、今回の調査区も同様な遺構状況を示すものと予想された。

調査地は表土を剥ぐと全面黒っぽい暗褐色土が薄く一層覆っており、すぐ地山に達する。遺構はすべてこの地山面で検出された。現地表から地山面までは、調査区の南で6cm、北で50cmで、地山面は南で高く、北へ向かって緩やかに傾斜している。

検出されたおもな遺構は、竪穴住居9棟、掘立柱建物9棟、土器焼成壇2基、溝4、土壇19等があり、時期的には、いずれも奈良時代のものと考えられる。

奈良時代の遺構

竪穴住居は、調査区の北西部で2棟、中央西部で4棟、中央部で1棟、南東部で2棟検出された。S B1260を除いては、いずれも一辺3m～5mの小規模なもので、竪穴内に明確な柱穴のみとめられたものはない。

こうした中で一辺6mを測るS B1260は、周溝が巡り、北壁東寄りには、かまどを備え、北東隅には、貯蔵穴と思われる小穴を有しているなど、他に比べ卓越しており、主要な建物の一つと考えられる。

ところで古里地区で検出された20基の竪穴住居では、北壁にかまどを有するものはなく、大半が東壁に設けられており、又周溝をもつものもない。規模も5m以内のものが普通であり、S B1260は異質な存在である。

調査区北西部で検出されたS B1247、S B1249は、それぞれ掘立柱建物S B1246、S B1250と重複しており、両者間の棟方向も近似しているところから、同方向での建て替え関係を認めることはできないであろうか。ただ両者間の新旧関係は、埋土に差異を認めることができず、明確でないが、古里地区での竪穴住居と掘立柱建物との切り合い関係の所見からすれば、竪穴住居が先行するようであり、ここでも同様な傾向を示すものと思われる。

S B1249は竪穴としての掘り方が浅いためか、北壁はなく、北東コーナーも崩れている。疑問の余地はあるが、一応竪穴住居として取り上げた。

S B1266は、S K1267、S F1265、S K1268、S D1271と重複。これらの新旧関係は、すべてを明らかにできなかったが、S D1271が最も新しく、S B1266はS K1267よりは古い。

S B1262はS B1261の南側に位置し、南東隅とかまどと思われる焼土面の高まりの一部が検出されたもので、その規模等は不明である。

掘立柱建物は、9棟中、5棟までが総柱建物で、その大半が調査区の中央部から南部にかけて集中している。棟方向は比較的不規則であるが、大局的に見てみると、北に対し20°以上東へ偏る群と、10°までにおさまる群と、北に対しやや西に偏る群とに分けられる。建物の規模は、S B1246、S B1250のような4間×2間、ないしは3間×2間で身舎のみのものが基本型と考えられる。倉庫址と考えられる総柱建物は、3間×3間のS B1264、2間×2間のS B1269のように、ほぼ方形プランを呈するものと、S B1253、S B1272、S B1270のような4間×2間の東西棟の建物とがある。4間×2間の総柱建物の宮域内での検出は今回が初めてである。

S B1270はその代表的なもので、梁行柱間1.8m、桁行柱間1.47mを測る。柱掘方は、一辺70cm前後、深さ55cm～82cmの方形掘方で、柱の太さはおよそ30cm前後である。すべての柱掘方で柱穴を確認することができた。

S B1272は、S B1270を小型化した形態をしている。梁行柱間1.6m、桁行柱間1.2mを測る。柱掘方は、側柱の深さが15cm～50cmであるのに対し、中央の束柱の深さは10cm～20cmと浅い。S B1253も一部調査区の東へ続いているが、同規模程度の東西棟総柱建物と思われる。

S B1257はS B1258と重複。南北棟か東西棟かは不明であるが、いずれも南北に柱掘方3間分のみを確認。建物は調査区の東に続く。柱掘方埋土の切り合い関係よりS B1258の方が新しい。

土器焼成竈は、水池土器製作址で見つかったものと同様、細長い二等辺三角形の平面をもつ。S F1263は長さ2.5m、最大幅1.5m、深さ16cmを測る。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直に掘られている。両面ともあまり使用されなかったためか、ほとんど焼けておらず、わずかに焼土粒や炭片の付着がみとめられた。埋土は炭混じりの黒褐色土で、土師器甕、杯片をわずかに含んでいたに過ぎない。

S F1265は長さ2.2m、最大幅1.3m、深さ12cmで、S B1266と重複するなどして、かなり原形を崩している。わずかながら壁面、床面に焼土、炭の付着が確認された。埋土内より少量の土師器甕、杯、皿片が出土。なお混入と考えられる須恵器杯蓋や土錘3個が伴出している。二基の土器焼成竈は長軸方向や、西辺の通りを揃えており、一定の計画性が窺われる。

土壇は、調査区の北西部、北東部、南東部にそれぞれ群として存在する。平面プランは崩れ

た円形ないしは楕円形を呈し、径1.8m～2.5m、深さ10cm～30cmのものが大半を占める。

S K1255はこれらの中で最大で、長径4.5m、短径3.2m、深さ53cmを測る。切り合い関係は不明だが、北でS K1254、南でS K1256と重複する。埋土内より土師器、須恵器が平箱で10箱ほど出土した。

調査区南部の土壇群からは、いずれも土師器甕、杯、皿片などに混じって土錘が出土している。特にS K1278では23個の土錘の出土をみた。

溝は南北溝1条、東西溝3条が検出された。

S D1251は幅80cm、深さ5cm～19cmで、途中跡切れながらも総延長57.5mまで確認できた。緩やかな蛇行線を描きながら、およそ北に対し東へ22°偏った方向で走る。この溝方向に近い数値を示す棟方向の建物は、竪穴住居ではS B1247、S B1249、掘立柱建物ではS B1246、S B1250、S B1264があり、これらの内いずれかに伴うものであろう。

S D1242は調査区の北を走る東西溝で、幅20cm～40cm、深さ3cm～6cmの細く、浅い溝である。およそ東に対し南へ29°偏っている。S D1252はこれと約3.3mの間隔を置き並行する東西溝と考えられ、両溝に挟まれた部分は道かもしれない。

S D1271は切り合い関係よりS B1266、S K1267よりは新しいが、出土遺物がないため時期は不明である。

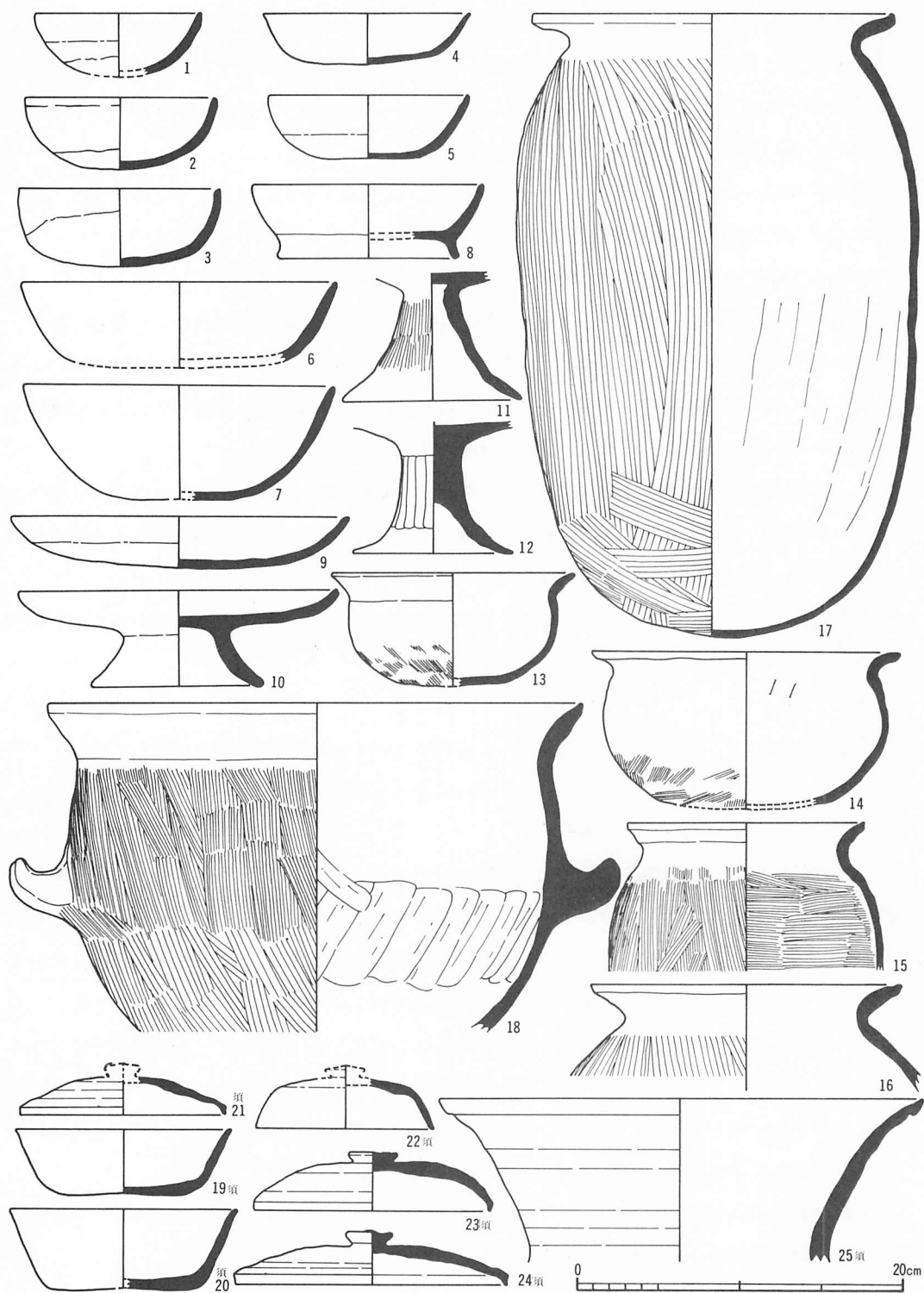
遺 物

遺物は土壇、竪穴住居、溝、土器焼成壇、柱掘方のほか、暗褐色土からも出土している。その内の大半が、土壇、竪穴住居址からのもので、しかも土師器が全体の9割以上を占めている。他に須恵器、土錘、砥石などがある。

S K1255からは、土師器甕、杯、皿、台付杯、台付皿、把手付鍋、高杯、かまど、須恵器甕、杯蓋、杯身が出土。中でも土師器甕と杯が多い。これらの中には、S K1254、S K1256出土のものが混在している可能性があり、基準資料として弱い面はあるが、時期的には杯を見てみると、平安時代前半とされている底部が平坦で口縁部が強く横なでされ、短かく真直ぐ延び、上端が屈曲するものではなく、丸底に近い底部をもち、しばしば粘土紐左巻き上げ痕跡をとどめている小形で淡褐色を呈するものが主流を占めており、又赤褐色を呈する大形品においては、ヘラミガキ手法が残っていることなどの点から、下限は平安時代前半までは下らず、上限は須恵器杯蓋にかえりのつくものはないので、8世紀初頭までは遡らないであろう。

S K1255出土の一群を奈良時代の土器としたが、その細かな編年の位置付けについては今後の詳細な観察と検討、一括資料の増加を待ちたい。

S B1260からは、北東隅の貯蔵穴内で小形甕2個体と台付皿・杯が、かまど付近で胴長甕、小型甕片が出土している。



第6図 第27次出土遺物 S K 1255

土錘は、調査区南部の土壇群だけで総数51個出土している。大きさは最大径1 cm前後、長さ4.0cm～5.5cm、重量5 g～10 gの細身のものと、最大径1.5cm以上、重量10 g以上の太身のものがある。中には70 gを越す大形品もある。

砥石はS K1280から1点出土。

ま と め

今回の調査で東裏地区内西部の様相が若干明らかとなった。当初の予想通り、奈良時代の遺構、遺物が発見されたが、遺構の密度は意外と低く、建物間の重複も少ないことが分かった。

検出された建物を見てみると竪穴住居、掘立柱建物共に棟方向の統一性を欠き、建物間の配置にも規則性は認められない。したがって調査地は全く反対の傾向を示す御館、柳原地区と一線を描き、同様な傾向を示す古里地区との関連で扱うべき地区と考える。又その性格は、出土遺物からすれば、甕、杯などの日常雑器が多く、緑釉陶器、墨書土器、硯等が一片も出土していないところから、公的要素の強い官衙地区とは認め難い面がある。

建物の時期区分については、竪穴住居ではまだよく分からない。掘立柱建物では、棟方向、重複状況等から大きくは3期ないし4期ぐらいに分かれるのではないかと考えられる。

そして建物群は、平安時代以降の遺物が皆無に等しいところから、奈良時代末から平安時代初頭には廃絶し、以後当地は、日常の生活の場として、あるいは官衙地区として供せられなかったものと思われる。

V 第 28 次 調 査

6AEO-D（柳原地区）

調査区は調査事務所の南70mの地点に当り、昭和53年度に実施した第20次調査区の北側に隣接する畑地である。

事務所南方の柳原、御館地区は昭和49年のN.Oトレンチ調査の結果より、建物跡の多い地区であることが予想されていたが、第20次調査で32棟、第19次調査で63棟もの掘立柱建物が検出された。これらの建物は東西方向に一定間隔をもって密集していること等の計画性がみられ、当地区は宮城内でも建物配置の様子を知るうえで重要な一帯であることが明らかにされた。第20次調査でも調査区の北端部に平安時代前半のS B 1046、S B 1080等の大型建物や、平安時代末期に廃絶し、区画施設であったと推定されるS D 1044等が認められた。

今次調査はこれらの遺構の北方の様子を面的に把握することを主な目的とし、東西47m、南北35m、1,420㎡の区画を設定して実施した。調査区は平坦で、北から南へ約20cmの比高差でわずかに傾斜する。層位は第20次調査区と同様で、第1層；耕作土、第2層；暗茶褐色の遺物包含層、第3層；黄褐色粘質土の地山となる。第2層は北端部で15cm、南端部で20cm内外で、地山面は南北端共に標高 9.8mと同レベルであった。

調査の結果、掘立柱建物29棟、井戸1、溝29条、土壇52を検出した。

奈良時代の遺構

土壇5と溝1条を検出した。

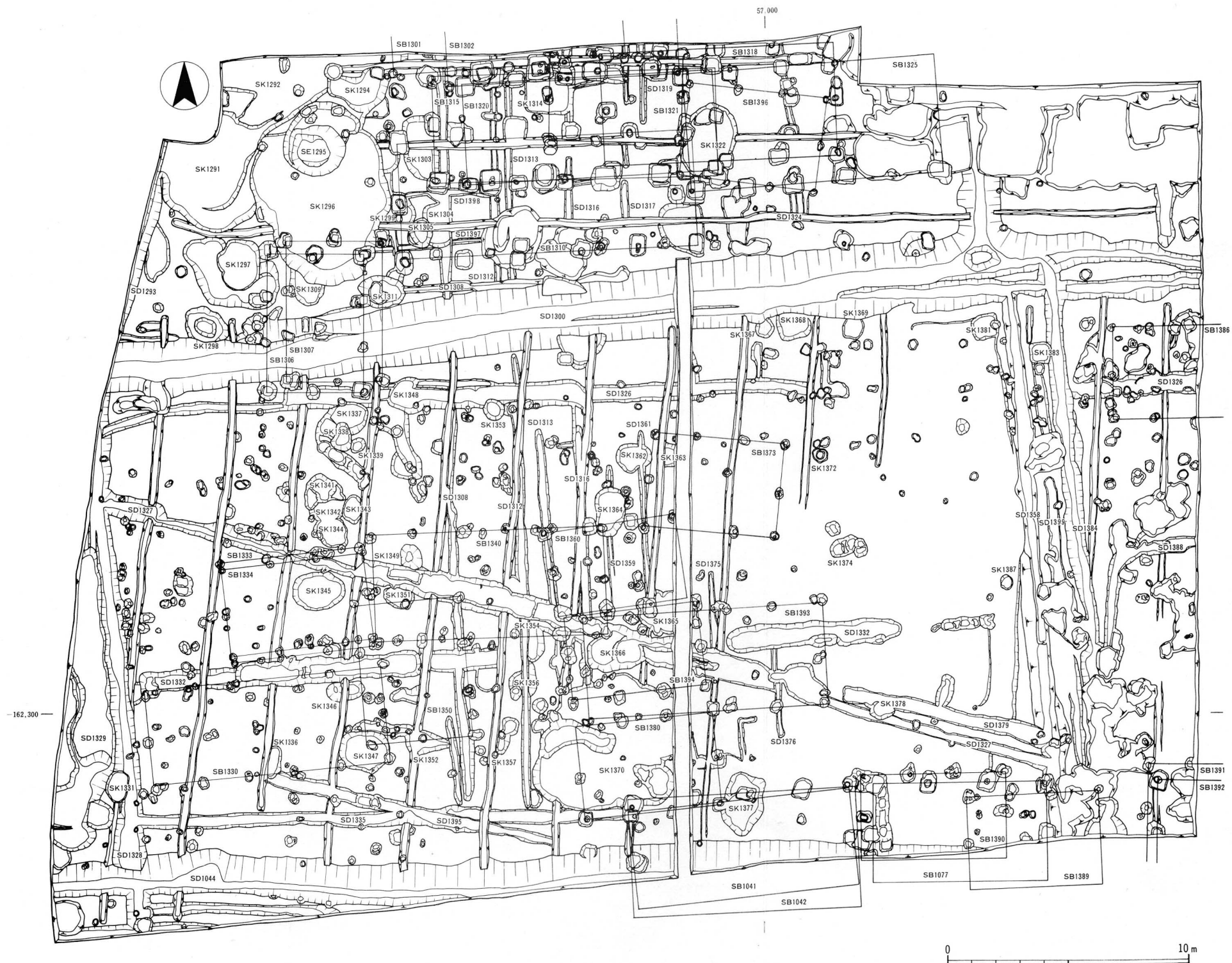
土壇はS K 1291、S K 1292、S K 1370、S K 1348、S K 1353がある。奈良時代前半のものと推定される深さ51cmのS K 1383以外はいずれも後半のものであった。土器の出土量はS K 1291とS K 1370が整理箱で2箱程度であった。

S K 1291は南北径約4m、深さ36cm、西端は平安末のS D 1293、北はS K 1292、東はS K 1296により上面を削平される。出土遺物は、底部をへう削りした杯や皿のほか、高杯、甕等の土師器に混り、須恵器の鉄鉢、杯、杯蓋等が少量伴う。杯底部外面中央に「寶」とおもわれる一辺3.6cmの正方形の凹印のある須恵器も一点出土した。

S K 1296は7m×5.5m、深さ約40cm。S K 1291より新しく、底部の平坦な土壇で、大型であるが、土器の埋蔵量は少ない。

S K 1370は径6m、深さ25cm。土師器の杯、皿、高杯、短頸壺や、製塩土器が出土。

S K 1348、S K 1353はいずれもS D 1326に伴うものと推定される。



第7図 第28次遺構実測図 (1 : 200)

溝ではS D1326がある。幅30cm～50cm、深さ約20cmの溝である。西端はS D1328に切られ、東は南北のOトレンチ調査区まで続いている。出土遺物は須恵器が土師器より多い。

平安時代前半の遺構

掘立柱建物7棟、土壇2、溝2条がある。

建物は調査区南端部のS B1041、S B1042、S B1077、S B1390、S B1391と、北端部のS B1301、S B1325がある。S B1041は出土土器が微量であったが、S B1042の建て替えであるものと判断して、前半に位置付けた。

S B1041、S B1042、S B1077は第20次調査区で北側の側柱列が確認されている。掘方の切り合いより、S B1046が古く、S B1042、S B1390、S B1077の順に新しくなる。

建物の規模は桁行5間、梁行2間のものから、4間×2間、3間×2間のものがある。柱間は掘方の小さいS B1390とS B1391が1.8mで6尺等間に復元できるが、他は2.0m～2.4m、7～8尺程度のものが多い。

棟方向はS B1391が方位に乗り、他はわずかに北へ偏る。最大でS B1325のE4°Nである。

建物配置ではなお不明な点が多いが、南端部で跡切れる一群から、北へ20数mの地点でS B1325、S B1301があり、調査区に隣接する北側にもこの時期の一群の存在が予想される。

土壇はS K1322とS K1377がある。S K1322の長径は3.0m、S K1377は2.5m、深さはそれぞれ30cmと25cmで浅い。出土遺物は比較的少なく、S K1377で整理箱1であった。土師器の他に、須恵器、灰土陶器が少量混じる。S K1377はS B1042より古く前半でも初頭に近いものと推定される。いずれも、この時期の建物群の近くに配置する。

溝は調査区の西端部にS D1328とS D1329があり、共に一部分を検出した。

S D1328は幅1.5m、深さ約35cmで西肩をS D1329で切られている。北で3°前後西へ偏より建物跡の方位と差異はない。

S D1329は南端がS D1044の直前で跡切れる。深さ45cmで底部に凹凸があり、土壇であることも考えられるが一応溝とした。近くにこの時期の建物跡が配されないことから、前半期の建物群を東西に画する溝である可能性もある。

平安時代中葉の遺構

掘立柱建物11棟、溝2条、土壇12、井戸1を検出した。

建物は調査区北端部のS B1302、S B1306、S B1307、S B1310、S B1315、S B1318、S B1320、S B1321と、中央南よりのS B1360、S B1394、S B1380がある。

北端部に集中する建物群は掘方埋土の切り合いが比較的明瞭であった。ただ、S B1321は1ヶ所のみ観察であったものの、一応、S B1318→S B1321→S B1315→S B1320→S B1310の順に新しいことを認めた。S B1318より西方へ連続的な建て替えが想定される。

これらの建物群の内でも、S B 1302、S B 1321以外は方形で大型の掘方をもち、柱間も 2.3 m ～ 2.4 m 内外で 8 尺等間に復元される。S B 1315は掘方径 1 m 内外で、内側に一まわり小さく、一段低い方形の掘方をもち、底部に根固めらしき河原石を配している。

棟方向は S B 1306、S B 1307が方位に乗り、他は 1° ～ 3° 西へ偏よる。

中央南よりの 3 棟はいずれも桁行 3 間、梁行 2 間で、柱間は 6 尺強である。S B 1306、S B 1307とほぼ同規模であるが、棟方向では S B 1380が $E 8^{\circ} N$ で、北端部の一群に比べて西への偏り方が大きい。

建物配置については、第20次調査区で明確にこの時期に推定される建物が検出されていないことから、S B 1380を南限に北方に広がる一群があるものと推定される。

土壇には S K 1292、S K 1294、S K 1308、S K 1327、S K 1337、S K 1387等がある。この内、整理箱で 1 ～ 2 箱の出土遺物があるものに S K 1292、S K 1294、S K 1323、S K 1337がある。

S K 1292は現径 7.5 m、深さ 26 cm、大型で浅い。面積に比して土器の出土量少なく大きな落ち込み状を呈する。S K 1294は S K 1292より一段低くなる。出土遺物は土師器の皿、杯、甕の他に須恵器片、灰釉皿、碗を含み、S K 1292と同期のものと推定される。

S K 1308、S K 1314は建物と重複するもので、深さは前者で 23 cm、後者で 13 cm を測る。S K 1308は $2.5\text{ m} \times 1.5\text{ m}$ で S B 1310、S B 1315より古い。S K 1314は一辺 2 m の正方形で S B 1315より古い。それぞれ S B 1315や S B 1310の内部あるいは、外部施設である可能性もある。

溝は S D 1327、S D 1379、S D 1395がある。

S D 1327は幅 0.5 m ～ 1 m、深さ 25 cm 内外で底部に凹凸が多い。同期の S K 1354より古く S K 1366より新しい。東端部で S D 1379と 2 条に分れるが、O トレンチ調査区でこの溝の一部が検出されており、東方へ 60 m 以上続いていることが明らかである。

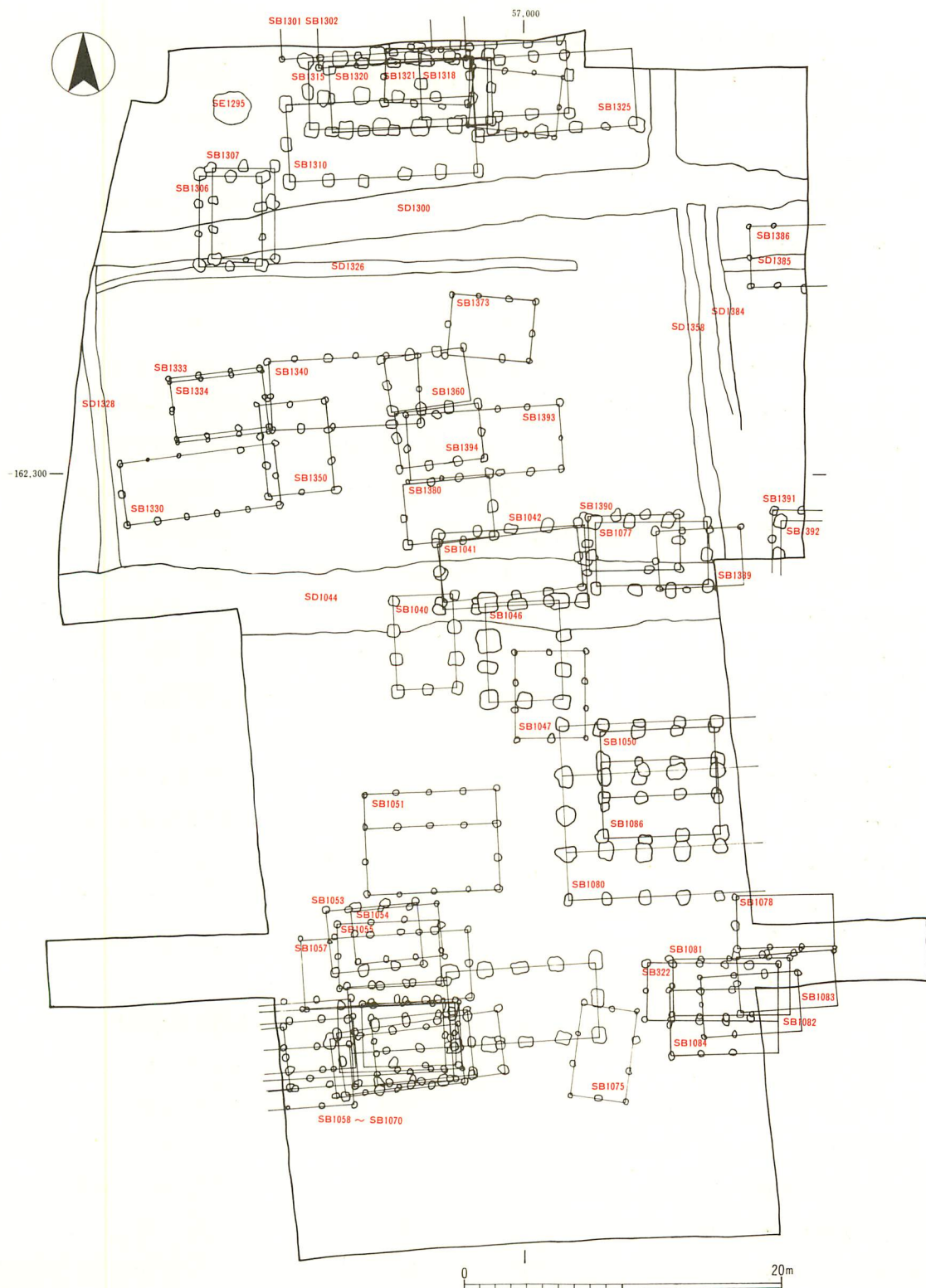
S D 1391は幅 0.5 m、深さ 8 cm 内外の平坦な溝である。西端部は跡切れるが、第20次調査区の北西隅にこの溝の延長部分を認めることや、S D 1327と同様に $E 15^{\circ} S$ の方向に並走することから、S D 1327に関連するものと考えられる。建物群の方向と差異が大きく共に性格は不明。

井戸は S E 1295がある。 $2.5\text{ m} \times 2.2\text{ m}$ の円形の素掘り井戸。断面は深さ 70 cm まで緩傾斜で、礫混じり粘質土より垂直になる。深さ 1.5 m 以下の礫層では壁面が 2 ～ 3 m 程度大きく内湾、崩落する。完掘できず全様は不明であるが、S K 1292、S K 1294の上面を削平しており中葉でも新しい時期に廃棄され、使用期間もかなり長いものと推定される。出土遺物は土師器の各種土器の他に、底部に墨書のある灰釉碗も出土した。

平安時代後半の遺構

掘立柱建物 9 棟、溝 17 条、土壇 10 を検出した。

建物には S B 1330、S B 1333、S B 1334、S B 1373、S B 1340、S B 1350、S B 1386、S B



第 8 図 第20次・第28次遺構配置図 (1 : 400)

1393、S B 1396がある。これらの建物は掘方の切り合いが不明確なものが多く前後関係は不明。

規模は桁行5間で梁行2間のものと、3間×2間の建物で、桁行4間はない。桁行5間の建物は前半、中葉のものより一まわり小型で、柱間は2m内外、桁行3間の建物は中葉のものとほぼ同規模で2m内外であった。

棟方向ではS B 1373、S B 1396のように北で東へ6°～7°偏るものが混じる。大半は北で西へ偏るが、S B 1340の2°から、S B 1333、S B 1334の7°までと、前半期に比べて統一性を欠き、第19、第20次調査区での傾向と類似する。規模、棟方向共に一致するものにS B 1352とS B 1393、S B 1396とS B 1373がある。

これらの一群は第20次調査区南西端に集中するS B 1053～S B 1070までの計14棟の一群より北へ10数mの地点に当る。建物数が少なく、東西へのバラツキを認めるものの、前半期の建物群に重複するものが少ないことは、第20次調査区と同様の傾向である。また、Oトレンチ調査区の一162,290m～一162,300mの南北座標軸内に多数の小ピットが検出されており、調査区の東側にも、SD1384を境にSB1386を初めとする建物群があることが考えられる。

土壇は、S K 1397、S K 1304、S K 1311、S K 1341、S K 1345、S K 1336、S K 1347、S K 1349、S K 1352、S K 1364等がある。土器溜めのな性格をもつものは第20次調査区より少なく、S K 1297、S K 1341がある。土師器の小皿、台付小皿が多数をしめ、杯、甕、高杯の順に少ない。灰釉の皿、杯、広口壺片と須恵器片を少量含む。他の土壇は浅く、土器の出土量も少ない。

溝はS D 1308、S D 1312、S D 1316を初めとする一連の南北溝がある。幅30cm～50cm、深さ10cm内外の小溝で、10条以上が不定間隔で並走する。南はS D 1385の直前より、N3°Sの方位で北へ延び、調査区外へ延長する。北端部にはこれらの溝に直交するS D 1397、S D 1398等の小溝があり、中央部にも2～3ヶ所で痕跡を認めた。昭和53年度の第18次調査区でも同様の溝を検出したが性格など不明な点が多い。

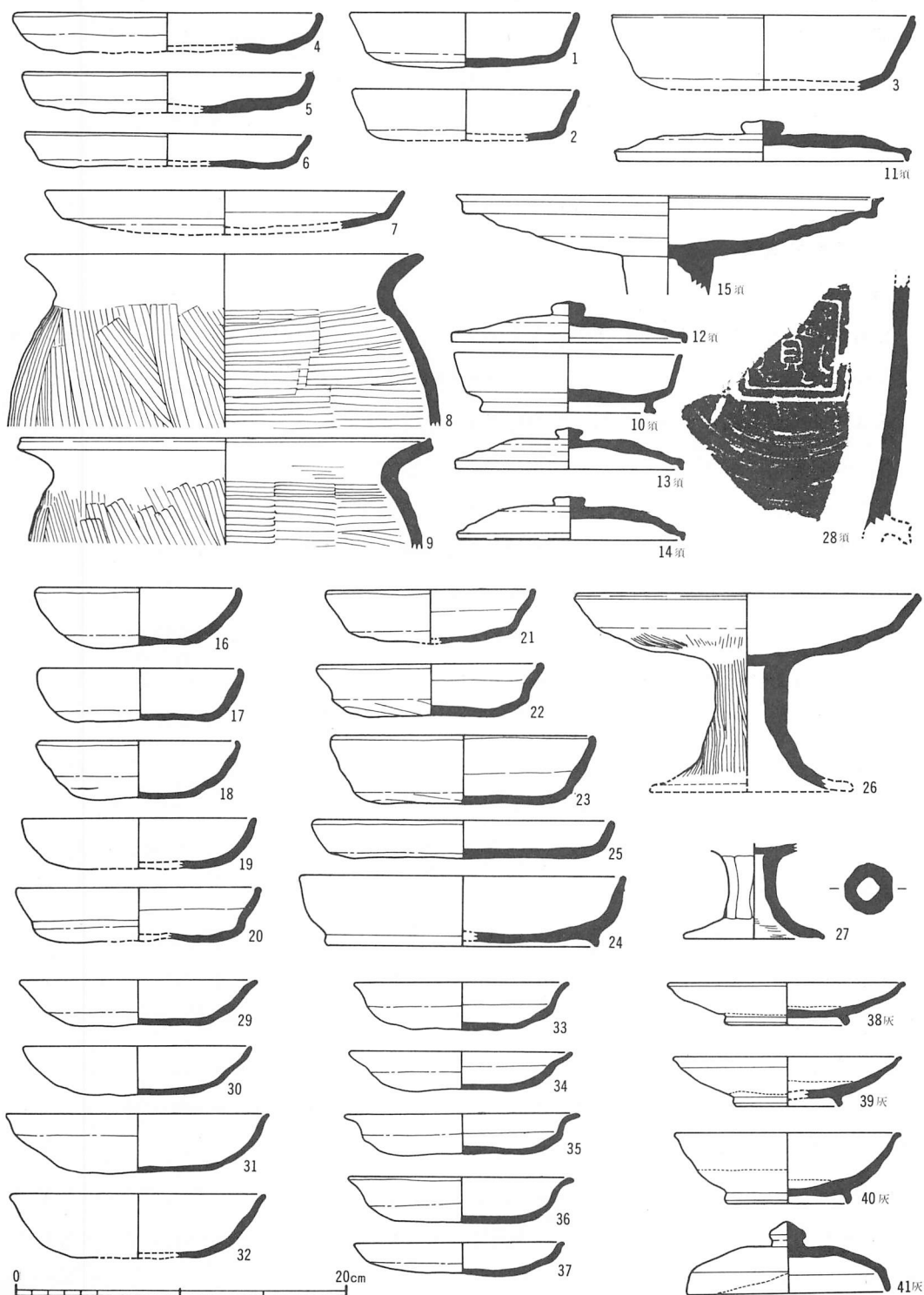
平安時代末葉の遺構

溝7条と土壇4を検出した。

この時期の遺構には、厚手で胎土の荒い糸切り痕をもつ粗雑な小皿と同質の杯が多く、少量の山茶碗を伴う。

溝はS D 1044、S D 1300、S D 1332、S D 1335、S D 1358、S D 1384、S D 1388、S D 1399等がある。

S D 1044は幅4m、深さ30cm。中央に細く浅い小溝を伴う幅1.5mの高所を残し、両端に緩傾斜の溝を造っている。Oトレンチ調査区でもこの溝が確認されており、真東へ60m以上続く。またS D 1384、S D 1399、S D 1400の関係は、S D 1044の状況によく似ており調査区外の南東隅で交わるものと予想される。S D 1300は5°前後西へ偏るが、深さ、断面、埋土状況がS D



第9図 第28次出土遺物 S K1291、1~15 S K1370、16~28 S K1337、29~41

1044に類似する。東端部で北と南へ分れるS D1384等の溝を伴い、さらに東方へ続く。S D1335、S D1388はそれぞれS D1044とS D1384に伴うものと推定される。

いずれも埋土状況が層位的ではなく、平安末期に急速に廃棄された様相を呈している。また、後半の建物群がこれらの溝で区画されていたとも考えられる配列を示しており、互いに関連する区画施設である可能性が強い。

土壇はS K1342～S K1344とS K1358がある。浅い小型の土壇で、土器の出土量も少ない。

時期不明の遺構

出土遺物が微量もしくは全く無いもので時期決定ができなかった遺構である。

S B1389、S B1392は建物配置状況より前半の建物である可能性が強い。土壇については新旧関係が確認できたものを列記しておく。S K1309はS K1293、S K1305はS K1304、S K1339はS K1338より新しい。S K1351はS D1327より、S K1367、S K1368はS D1300より古い。

ま と め

建物の配列を中心に、いくつかの特徴的な傾向が明らかになった。

前半期では棟方向E3°Nの建物にS B321、S B1042、S B1080、S B1318がある。中でもS B321、S B1042、S B1318はいずれも桁行4間の建物で、直線上に妻柱通りを揃えている。また、E2°Nの建物にS B1040、S B1050、S B1077があり、共に3間×2間と同規模である。これらの様子は第20次調査区を中心とする一画とこれに対応する、S B1318、S B1325以北の小区画の存在を想起させる。

中葉の建物についてはなお不明な点が多いが、今次調査区に関する限り、前半期の建物の近辺に配されているものと推定される。

これらの様子と近くのN、Oトレンチ、第19次調査区の結果と照合すると、東西及び南北方向に連続する区画設定があったことが推定される。

建物の建て替えの推移については、平安時代的前半から中葉にかけて東から西へわずかに移動する傾向を見せている。中葉から後半にかけては更に西方へ移動し、計画性がややくずれる様子も窺える。

出土遺物はS K1377より出土した刀子以外はすべて土器であった。緑釉陶器はS K1347等の埋土内から出土したものを含め50数片を数える。また、内面を硯に利用した須恵器杯蓋がS K1292と柱掘方内から各一点ずつ出土している。

総出土量は第20次調査区に比べて多量の土器を埋蔵する土壇が少なかったこともあり、整理箱で60箱程度で、やや少ない。しかし、奈良と平安時代の過渡期のものと推定できるS K1280等の土壇より良好な一括資料を得た。

VI 第 29 次 調 査

(中町地区トレンチ調査)

中町地区北部の畑地一帯は、これまで遺構、遺物の実態があまり明確になっていない地区である。このため本年度より 3 ヶ年にわたる調査によって当地区の基本的な保全の方針を決めていくことになっている。

今回の調査はこの畑地一帯のうち西辺及び南辺を対象に幅 4 m (一部 3 m) のトレンチを総延長約 500 m にわたって設定し、調査を実施した。面的にまとまった広がりをもつ調査区ではないため、検出した掘立柱建物、土坑、溝などの遺構に全容を知り得たものは少なく、確認できなかった建物もあると思われる。ここでは中地区又は小地区ごとに該当するトレンチ別にその調査の概要を述べていきたい。

6 A F I - A 地区

今回のトレンチで最も北西に位置するトレンチで、対象とした畑の地割りの関係から本トレンチのみ幅 3 m として、南北方向に約 70 m にわたって調査を実施した。

〔遺 構〕掘立柱建物 2 棟のほか土坑、溝等を検出した。掘立柱建物はいずれも平安時代中葉のものと考えられ、S B 1400 は桁行 5 間の建物で東にのびるものと思われる。S B 1401 は 3 間の柱列を検出したが東西のどちらへのびるものか不明である。

一方トレンチ北端で検出した S D 1402 は平安時代以降近世までの遺物を含み、一部に平安時代前半の溝が削り残された状態で見られることから、第 24 次調査で検出した S D 1240 と類似しているため、この延長部分にあたるものと考えられる。そのほか平安時代前半と思われる土坑 S K 1404 や、平安時代中葉の S K 1403 等を検出したが、いずれも遺物の出土は少ない。

〔遺 物〕本トレンチでは遺物の多い土坑も見られず、全体に出土遺物の量は少なかった。また緑釉陶器もトレンチ南半部で 2 点の細片を見たのみである。

6 A F L - A ・ B ・ D ・ E 地区

竹神社の北東にあたり、近鉄線の北約 20 m に幅 4 m のトレンチを広域圏道路から東へ 59 m 設定して調査を実施した。

〔遺 構〕多量の土器が出土する土坑、大型の掘立柱建物等多数の遺構を検出した。

土坑群の東半部では平安時代末から鎌倉時代と考えられるものが多く、S K 1408、S K 1409 は平安時代末、S K 1406、S K 1407、S K 1410 などが鎌倉時代のものと考えられる。これらの土坑は平安時代中葉以前の土坑に比べ遺物の出土量は少ない。

小地区Bにあたるトレンチ中央付近の土壇は平安時代中葉以前の土壇ばかりで、S K1424は奈良時代のものと考えられる。また平安時代前半の土壇としてS K1414、S K1415、S K1416、S K1418、S K1420、S K1425などがあげられ、平安時代中葉の土壇としてS K1412、S K1413、S K1419、S K1422、S K1423、S K1426があげられる。これらの土壇には多量の遺物を出土するものが多くS K1423では整理箱22個、S K1425では整理箱27個にも及ぶ多量の土器が出土している。その他の土壇も含め出土土器の大半が土師器の杯、皿類である。

また掘立柱建物ではS B1411、S B1427の2棟はいずれも時期不明であるが、1 mを超す大型の掘方をもつもので、対応する柱列を確認できなかったものの、今後の調査でその全容は明らかにされるものであろう。

そのほかS B1421も時期不明であるが、平安時代中葉の建物としてS B1428、S B1430があり、平安時代後半の建物としてS B1431を検出した。

一方溝では時期の明確なものは少ないが東西溝S D1417と南北溝S D1429の2条を検出した。S D1417は小地区BではS K1415をはじめ土壇群の上層で検出し、S D1429も平安時代中葉の土壇に重複しているものと考えられ、いずれも出土遺物に平安時代中葉以前の土器が混在していた。

〔遺物〕本トレンチでは大量の遺物が出土したが、その大半は前出のとおり土壇より出土した平安時代前半から中葉の土師器杯・皿類である。

奈良時代の土壇も1ヶ所見られるが、平安時代前半以後の当地区における土壇と、このような土壇の群集する当地区の性格を示す遺物であるといえよう。

また緑釉陶器の出土も少なく、わずか6点出土したのみである。

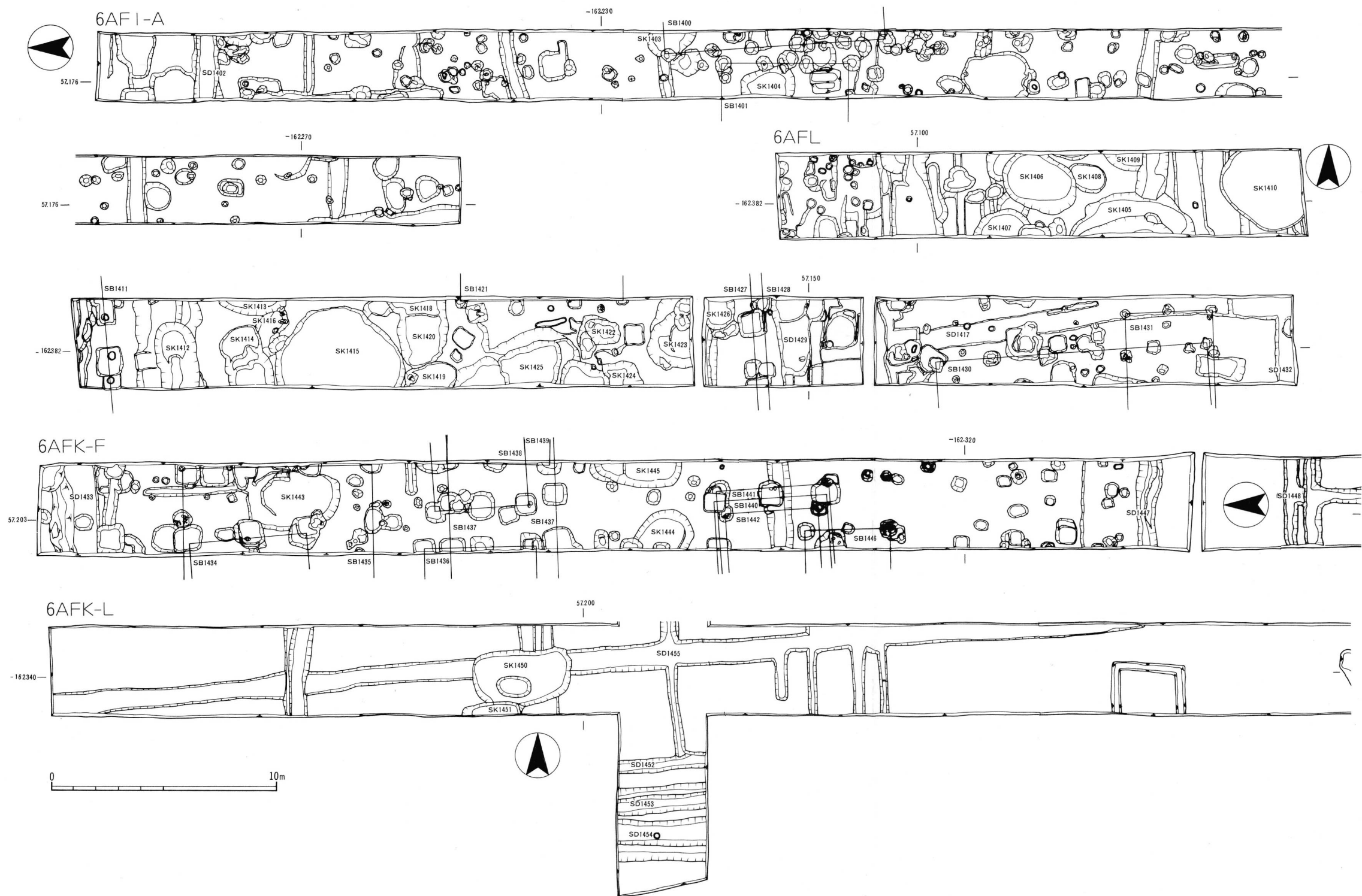
6 A F K－F地区

前出の6 A F I－A地区の南東に設定したトレンチで、隣接地でこれまで3ヶ所にわたり個人住宅建設に伴う事前調査が行なわれている。

〔遺構〕今回のトレンチ調査で最も多く、9棟の掘立柱建物のほか土壇3ヶ所、溝などを検出した。掘立柱建物のうち平安時代前半のものにはS B1436、S B1437、S B1438、S B1439、S B1440、S B1442があり、平安時代中葉のものにS B1434、S B1441、S B1446があり、平安時代後半のものにS B1435がある。これら建物の大半が大型の柱掘方をもつものである。また昭和52年度の第17－3次調査によってS B1436、S B1437の柱掘方が確認されている。

S B1440、S B1441、S B1442の3棟はほぼ同一場所に重なって検出され、S B1442→S B1440→S B1441の順に建てられたものであり、S B1441では柱掘方に根石が置かれている。

一方土壇では平安時代前半のものにS K1443、S K1445、平安時代後半の土壇にS K1444の3ヶ所を検出した。S K1445からは多数の遺物を出土したが、奈良時代の遺物も含まれること



第10図 第29次遺構実測図 (1:200)

から他の遺構と重複しているものと思われる。

〔遺物〕S K1445から径約6 cmの小型円面硯が1点出土したほか、この土壇からは「万」の墨書のある土師器碗が出土しており、製塩土器も含まれる。

また緑釉陶器は小破片が多いが24点出土し、花文の認められるものが2点含まれる。

6 A F K－L 地区

多くの掘立柱建物を検出した6 A F K－Fの南に続く畑地で、南北トレンチと東西トレンチとの交点にあたる。前出の6 A F K－F地区の南端を含め本地区では全面にわたって黒色土が地山となっている。

〔遺構〕本トレンチでは数条の溝のほか土壇2ヶ所を検出したのみで、掘立柱建物はもちろん柱掘方もまったく検出されなかった。

溝は6条の東西溝とこれに直交するように小規模な南北溝が見られる。いずれも遺物の出土は少なく、その時期は不明確ではあるがS D1455は平安時代中葉以前のものと考えられ、S D1449も同様の時期と考えられる。またS D1448は平安時代後半、S D1452は平安時代末の遺物が見られ、S D1453、S D1454は鎌倉時代の溝と考えられる。このように各時期の東西溝が多く、当地区は齋宮存続期間のうちの長期間にわたって一定区画の境界になっていたものと考えられる。

また土壇はいずれも平安時代前半のものでS K1451は調査区外にのびるものであるが、S K1450は4.5m×2.5mの略楕円形を呈する全容を検出し得た。いずれも多量の土器を出土し、S K1451では土師器の杯・皿が大半を占めているが、S K1450では土師器の杯・皿のほか須恵器の杯、杯蓋、壺なども出土している。

〔遺物〕本トレンチの出土遺物は大半が2ヶ所の土壇から出土したものである。ことにS K1451は土壇の一部を調査したのみであるが、多くの完形品を含む多量の土器が出土している。

緑釉陶器の出土はS K1450で細片1点が出土したほかトレンチ全体で5点出土している。またS K1451出土の土師器には墨書のあるものが2点含まれる。

6 A F M－C・E・F・G 地区

一定区画の境界にあたると考えられる6 A F K－L地区から道路をへだて近鉄線まで延長した南北トレンチである。

当地区は地元の人の話によると近代まで寺のあった場所といわれ、トレンチの大半が多量の瓦礫を含む溝や井戸等によって攪乱されていた。このため検出し得た遺構は少なく、土壇4ヶ所のほか、溝1条と数ヶ所の柱掘方を検出したのみである。

土壇には平安時代中葉のS K1459、平安時代後半のS K1458、平安時代末のS K1457がありこれらの土壇の出土遺物は少ない。またわずかに削り残されていた南北溝S D1460はおびただ

しい量の土師器杯、皿を含む溝で、平安時代末のものと考えられる。

このほか遺物の出土は全くないが埋没土の状況から1辺1mを超える大型の柱掘方と考えられる遺構が数ヶ所で見られ、面的な広がりをもった調査を行えば少なからぬ大形掘立柱建物が検出されることが予想される。

【遺物】攪乱による若干の中・近世の遺物を除いて本トレンチの出土遺物の大半はS D1460から出土したものである。そのほとんどが土師器の杯・皿であるが、緑釉陶器片の出土も多い。S K1456、S K1457で各1点小片が出土し、S D1460の埋没土中より3点が出土しているほかこの付近に集中して出土し、トレンチ全体で16点の出土を見た。これらの緑釉陶器には大きな破片も多い。

6 A G J - B・D・G・H・K・L・O・P地区

今回の調査で最も長いトレンチとなった地区で、長さ約145mに及ぶ。トレンチの西 $\frac{2}{3}$ で各時期の遺構が検出されたが、東 $\frac{1}{3}$ では土取りによると思われる攪乱のためほとんど遺構は検出されなかった。

【遺構】平安時代前半の遺構にはS D1463、S D1466、S D1475、S D1480の溝と掘立柱建物S B1468とがある。S B1468は北にのびるものと考えられ柱掘方の1ヶ所はS B1467と重複する。

平安時代中葉の遺構には、S K1464、S K1465、S K1477の土壇3ヶ所、S D1476、S D1478、S D1484の溝と掘立柱建物S B1467、S B1469とがある。S K1464とS K1465は重複し、S K1464が新しいことを確認している。S K1477はS D1478に切られた浅い小規模な土壇で、遺物の出土は少ないが、花文のある緑釉陶器の小片1点が出土している。

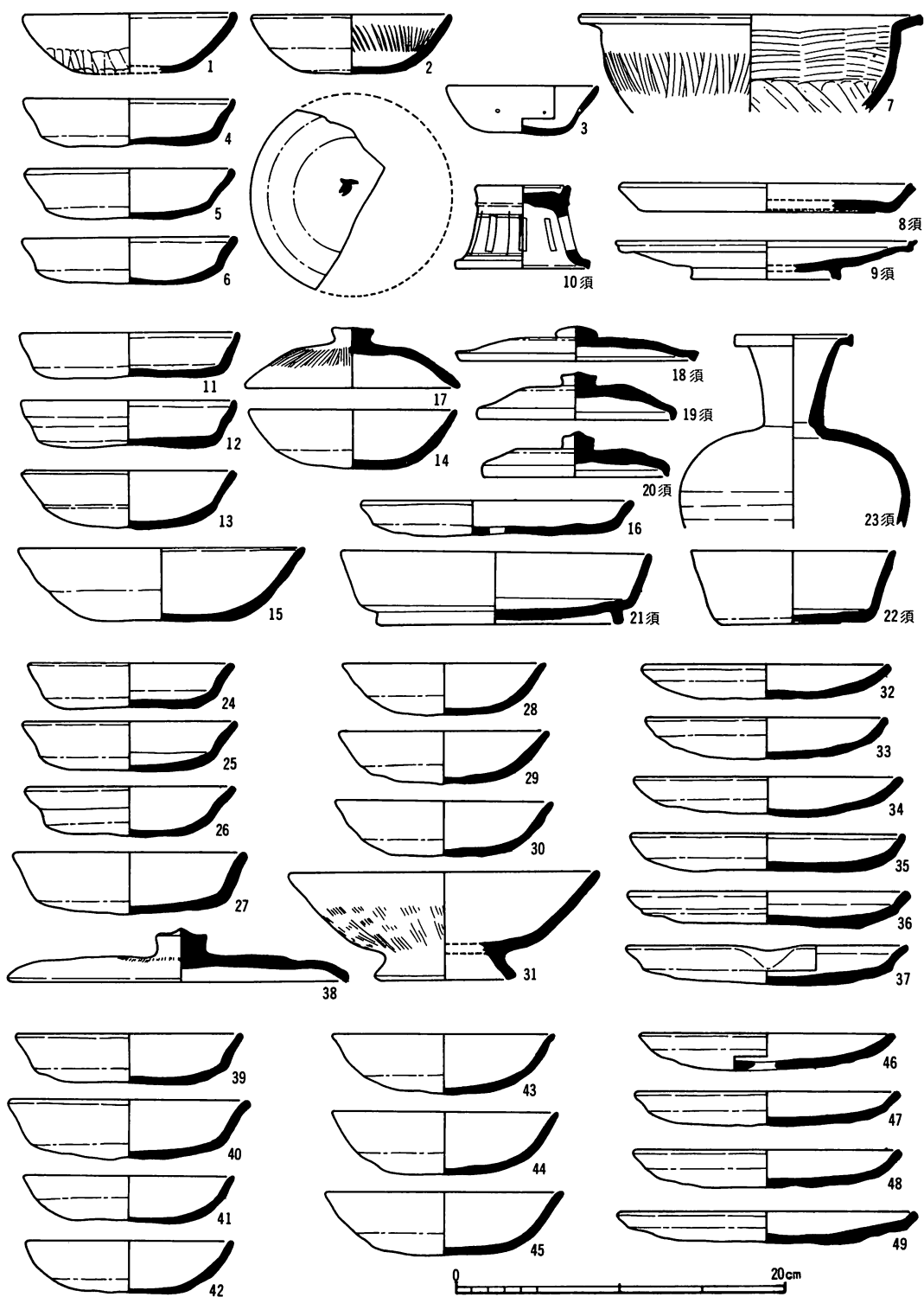
2棟の掘立柱建物はいずれも北側の調査区外へのびる南北棟でS B1467の柱掘方では根石をもつものがある。棟方向は2棟ともN6°Wを示す。

平安時代後半の遺構ではS D1479の溝1条と小規模なピットが散見されるのみである。

平安時代末葉の遺構にはS B1470、S B1472の掘立柱建物2棟と、溝S D1474、土壇S K1485などを検出した。S B1470は桁行5間の東西棟で5間×2間の建物であろうと考えられる。S B1472は南北棟で調査区から南へ広がるものと考えられる。S D1474は深さ10cmたらずの小規模な溝で南へ屈曲する。

S K1485は不整形な土壇で、一応平安時代末葉と考えたが、平安時代前半の土師器の杯、皿や須恵器の横瓶などが完形に近い状態で出土しており、平安時代前半の土壇と重複するものと考えられる。

また鎌倉時代の遺構としては3条の南北溝を検出した。いずれも幅1.2~1.5m、深さ50cm前後である。S D1461、S D1462はトレンチ西端にあり、約2.5mの間隔をおいて検出したもの



第12図 第29次出土遺物 S K 1445、1～10 S K 1450、11～22 S K 1451 A、24～38
S K 1451 B、39～49

である。S D1482はトレンチのほぼ中央で検出したもので周囲に同様の時期の遺構は全く見られない。

【遺物】S K1464、S K1465、S K1485などの土壇からまとまって出土した遺物のほかはあまりまとまった遺物の出土はない。

緑釉陶器はS K1477のほかS D1479、S B1467、S B1470の柱掘方で各1点出土し、計5点の小片が見られたほか、包含層より青磁碗の小片が1点が出土した。

6 A G K-B・C・F・H地区

今回のトレンチ調査の東端にあたり、6 A G Jに続く地区である。中央に果樹園があるため17mをへだてて東西に別れている。

【遺構】西半の小地区B・Cでは、6 A G Jの西半に見られた土取りによる攪乱はわずかであるにもかかわらず検出した遺構は平安時代中葉の土壇S K1486、S K1487の2ヶ所と若干のピットのみである。

東半の小地区F・Hでは、平安時代前半と考えられる1辺6.5mの方形を呈する大型の掘り方をもつ井戸S E1490と、平安時代末葉の掘立柱建物S B1488、S B1489の2棟などを検出した。S E1490は遺構面下約50cmテラス状の平坦面を形成し、掘り方は径約4.3mにせばめられ、平坦面には暗渠の溝をめぐらせた上に地山の砂礫土を積むなど手のこんだ構造がうかがえるものである。

一方掘立柱建物はいずれも桁行3間の小規模なものと考えられる建物でS B1488は北へ、S B1489は南へ広がるものと考えられる。

【遺物】全体に遺物の量は少ないが、特殊な遺物としてS K1486から出土した土馬があげられる。風化して表面の剝離した、背から尾にかけての破片で現存長17.5cmを測る。

そのほか緑釉陶器はS E1490の北の包含層で細片1点が出土したのみである。

まとめ

今回のトレンチ調査は総延長500mに及ぶ広範囲にわたるものであった。この中には一部に攪乱などによって遺構が十分に把握できなかった地区もある。しかし全般的に見れば当中町地区の一带は、南西部で特徴的な土壇が群集し、中央部では大型の建物群が形成されている。また東部では大型井戸や掘立柱建物が検出されている。

6 A F K-Lのごとくほとんど遺構の検出されない地区では斎宮跡における一定区画の境界に相当するなど、遺構の無いことによる重要性も考えられよう。

このような各地区の諸傾向はおおまかには奈良時代から鎌倉時代にわたる各時期に共通する傾向であり、今回の調査の結果は史跡斎宮跡において中町地区は重要な位置を占める地区であることを知る端緒となったものといえよう。

Ⅶ 第 25 次 調 査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

第25次－1次調査 6ADP-K (三重土地ホーム)

近鉄斎宮駅西南の参宮街道沿で、幅4mのトレンチをT字状に設定して93㎡調査した。この場所は、参宮街道に面しているためか中世以後再三にわたり盛土整地がなされており、地山面までの遺物包含層は60～80cmを計り他地区よりかなり深い。

検出された遺構は、斎宮関係としては、掘立柱建物S B1540(奈良時代)、井戸S E1547(平安時代前半)、溝S D1545(平安時代)があるが、大半の土壇、柱掘方は中世以降の遺構である。出土遺物は、奈良時代から江戸時代にわたる各種土器類であるが、量的には中世以降の土師器が多い。黒褐色土中から緑釉陶器碗4片が出土した。

第25－2次調査 6ACA-Y (脇田宅地)

坂本集落南側でも、県道東側の字古里地区で幅2～3mのトレンチをL字状に設定し75㎡調査した。検出した遺構は、溝と土壇のみで非常に少い。S D1550は奈良時代、他は時期不明。

第25－3次調査 6ADD-F (池田宅地)

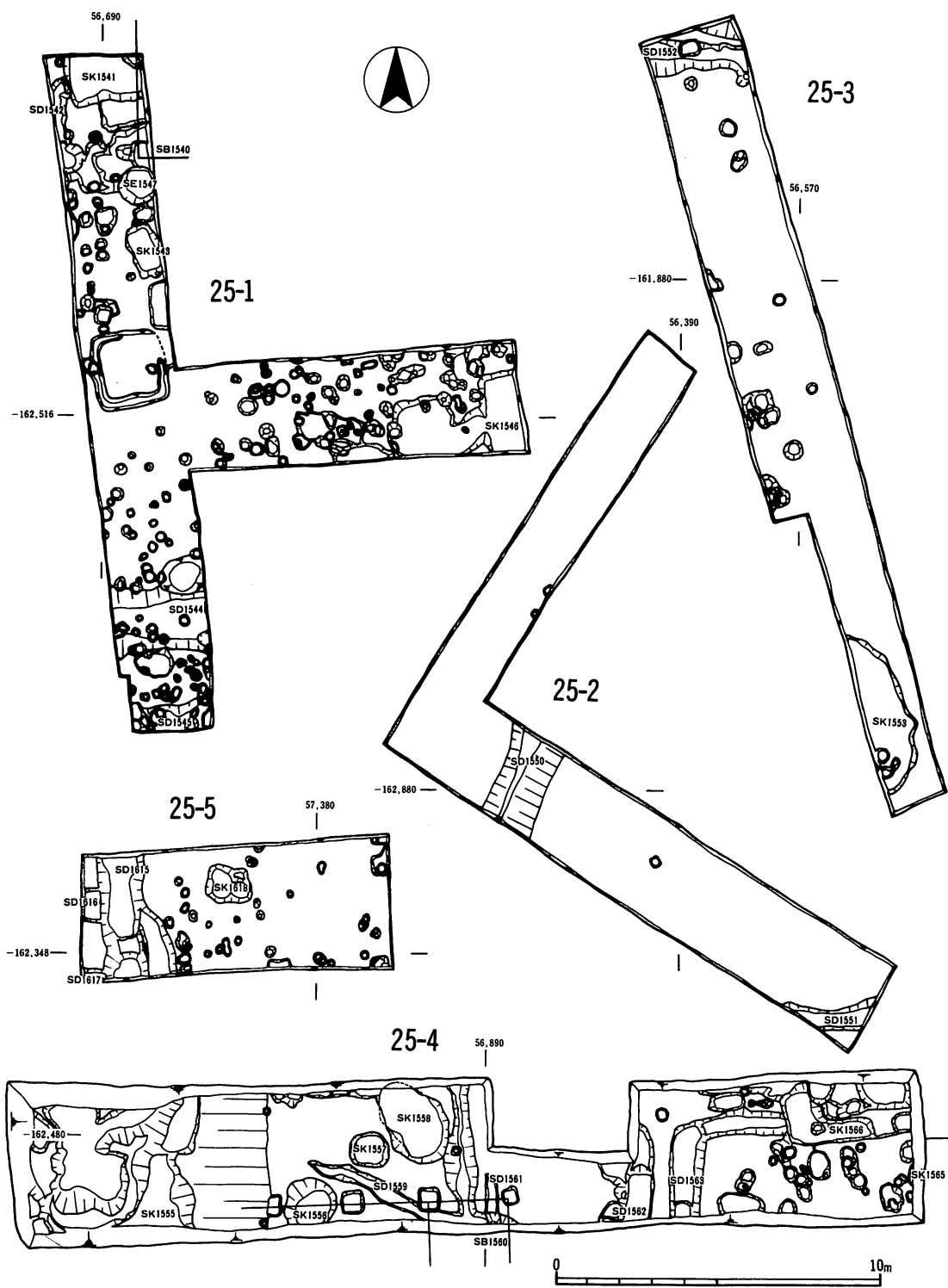
斎王集落北西部の字篠林の宅地で、幅3mのトレンチを設定し59㎡調査した。検出した遺構は、柱掘方、溝、土壇等で、いずれも奈良時代に属する。S K1553からは、土師器杯、碗、甕、須恵器杯、鉄鉢、台付長頸壺等が出土した。

第25－4次調査 6AER-H (牛葉公民館)

竹神社西側の旧参宮街道に面した牛葉公民館敷地内で、幅4mの東西トレンチを設定し99㎡調査した。検出した遺構は、掘立柱建物、溝、土壇、柱掘方等であり、その大半が中世以降のものである。斎宮跡に関連する遺構は、掘立柱建物S B1560と土壇S K1557のほかは若干の柱掘方があるにすぎない。S B1560は、柱掘方が方形を呈し、柱間は約2.4mを測るが、規模、棟方向は不明である。東隅の柱掘方は小さく浅いので、廂柱掘方とも考えられる。包含層から緑釉陶器輪花碗の破片が4点出土した。S K1555は深さ2.5mを計る深い穴で、多量の江戸時代土師器、陶器が出土した。なおこの場所は、天保8年斎宮村古図による観音寺付近にあたる。

第25－5次調査 6AGN-H (丸山宅地)

宮城東端部の中町字鍛冶山地内において、幅4mのトレンチを東西に設定し35㎡調査した。検出した遺構は、溝、土壇、柱掘方等である。西端部には、幅1.0～1.4m、深さ35cm前後の南北溝とこれに交わる浅い溝2条がある。S D1560は平安時代末の時期が与えられるが、ほぼ南



第13図 第25-1次 第25-2次 第25-3次 第25-4次 第25-5次遺構実測図 (1:200)

北軸に乗っており、区画施設である可能性が強い。S K 1563は、鎌倉時代初期の土壇である。

第25－6次調査 6 A F H－A（谷口宅地）

広域圏道路に面した字西加座の畑地で 240㎡調査した。検出した遺構は掘立柱建物 1、溝 14 土壇 4、柱掘方等である。このうち奈良時代の遺構は幅 70cm、深さ 10cmの浅い南北溝 S D 1627 のみで、他は平安時代にくだる。S B 1630は 3 間×2 間の南北棟で平安時代初期に属する。S D 1626、S D 1625、S D 1622は平安時代前半、やや西よりを南北に蛇行する。S D 1624は平安時代後半にあたる。出土遺物は各種土師器、須恵器、灰釉陶器のほか緑釉碗片が 4 点出土。

第25－7次調査 6 A E K－V（奥田宅地）

『斎王の森』南東部の字下園地区の住宅密集地で、幅 2 m のトレンチを南北に設定し 24㎡調査した。検出した遺構は、平安時代後半の溝 S D 1580と室町時代の不整形土壇 S K 1581で、他は時期不明の土壇である。

第25－8次調査 6 A F C－D（山本宅地）

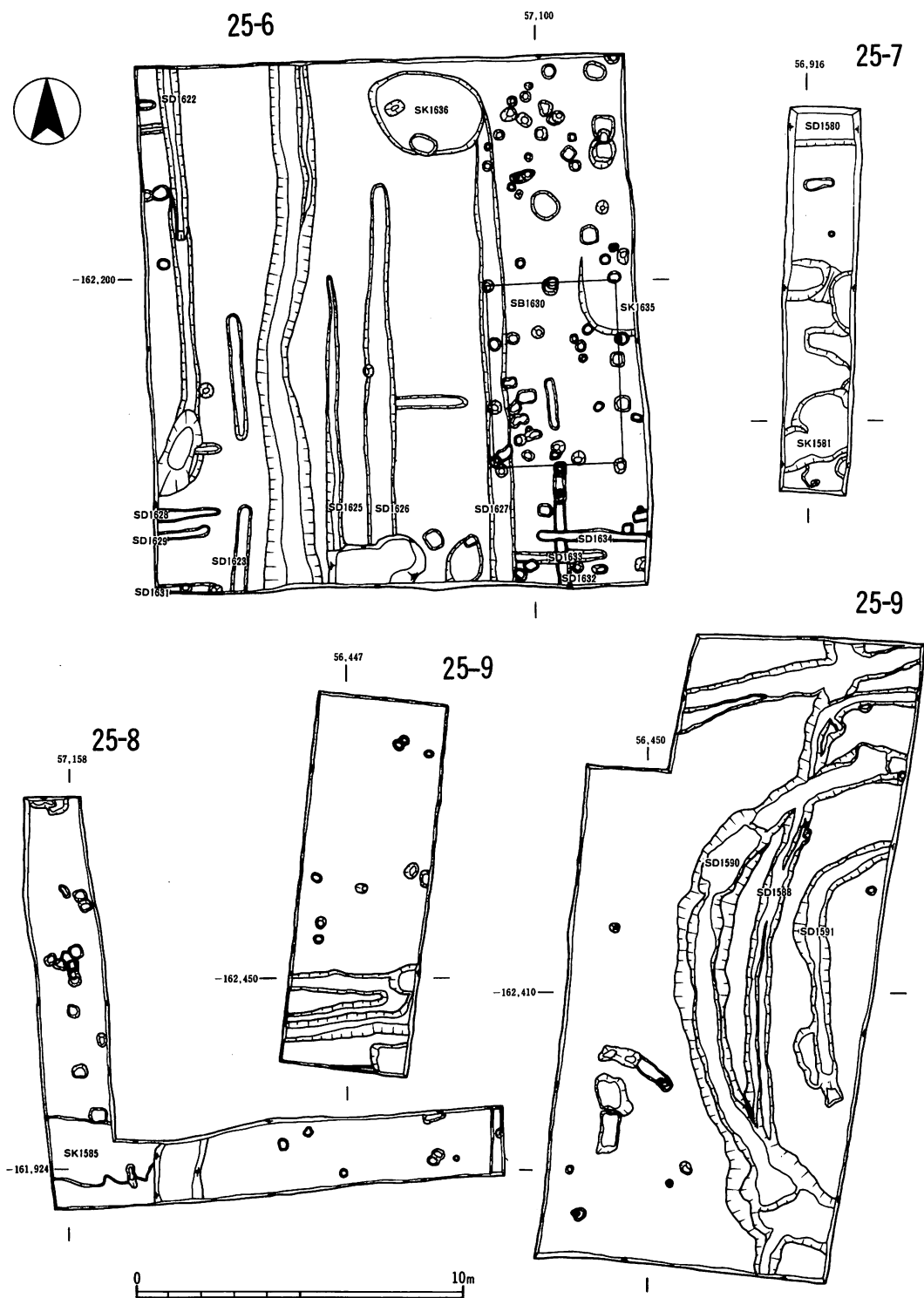
東海造機の東側の字西前沖で、幅 2 m のトレンチを L 字状に設定し 48㎡調査した。この場所は旧陸軍通信隊、さらには斎明中学校用地となっていたためかなり攪乱されており、遺物包含層は部分的に数 cm 認められたに過ぎない。このため遺物はほとんど出土していない。検出した遺構も少なく、奈良時代土壇 S K 1585のほか平安時代後半の柱掘方が若干みつかった。

第25－9次調査 6 A C N－C（北出宅地）

斎宮小学校東の字広頭の畑地で 216㎡調査した。調査地区はこの申請地が南北に細長いため、中央部を土置場とし、北部は面的に広げ、南部は幅 4 m のトレンチを設定して調査した。北区で検出した遺構は円形周溝 2、南北溝 1 である。S D 1590は幅 1～1.6 m、深さ 40～60 cm を測る円形の溝。S D 1591はこの内側にほぼ平行して走る幅 60 cm、深さ 20～40 cm の溝で埋土中から須恵器の台付長頸壺がほぼ完形で出土しており、奈良時代前半のものと考えられる。このような円形周溝は、隣接する斎宮小学校の改築工事に伴う事前調査でも 2 基検出されており、この付近に群をなしていたことが想定される。S D 1588は平安時代後半の溝である。南区トレンチでは、浅い 2 条の東西溝が検出されたほかは目立った遺構はないが、緑釉碗片が 1 点出土。

第25－10次調査 6 A E V－A（永島宅地）

牛葉集落南側の字鈴池で水田と集落の間にある畑地において 83㎡調査した。北半部に大きな土取り穴があって遺構は相当破壊されていたが、掘立柱建物 1、土壇 1、井戸 1、柱掘方等が検出された。S K 1601は奈良時代の各種土師器、須恵器が出土した。S B 1599は平安時代前半のもので、建物の北西部の一部と思われる。S E 1600は 2 段に掘られた素掘りの井戸で平安時代後半のもの。S D 1597は幅 1.2 m、深さ 50 cm の平安時代後半の溝。出土遺物で注目されるのは、この小範囲の調査地にかかわらず 30 点もの緑釉陶器が検出されていることである。最も多



第14図 第25-6次 第25-7次 第25-8次 第25-9次遺構実測図 (1:200)

いのは S E 1600 の 18 点で段皿、椀等である。

第25-11次調査 6 A C F-B (沢宅地)

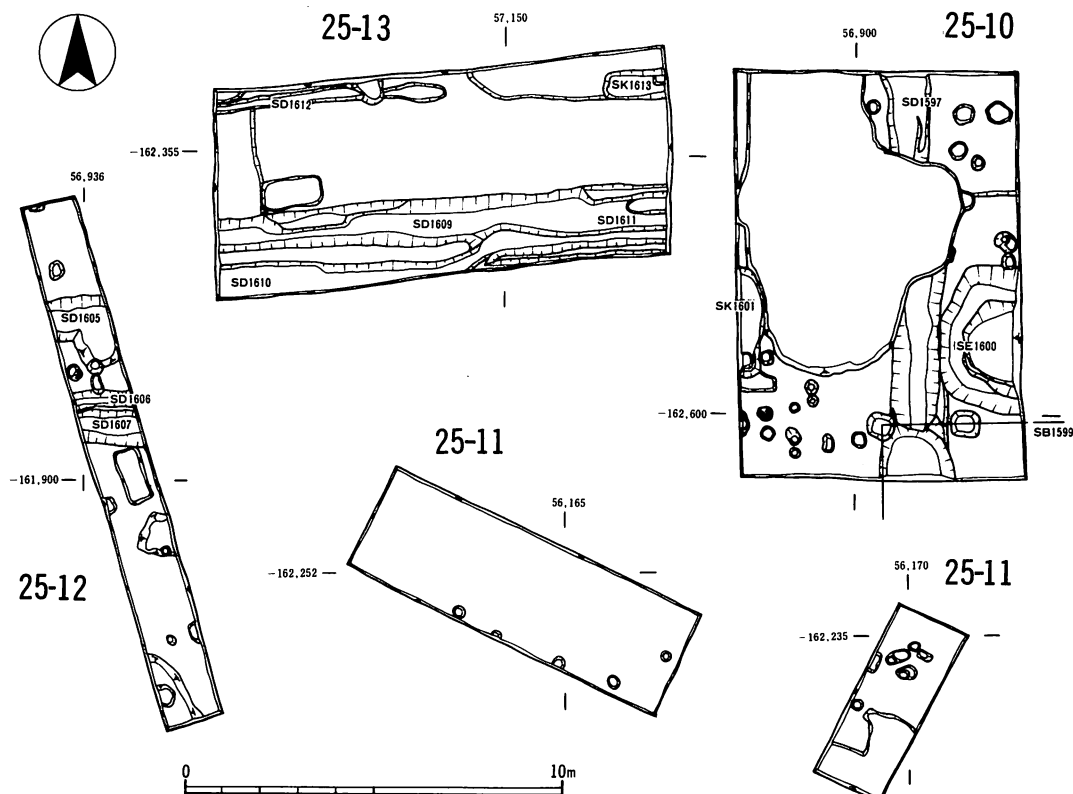
県道南藤原竹川線沿の字東裏の申請地で、幅 2 m と 3 m のトレンチを 2 条設定し 37 m² 調査した。両トレンチとも耕土の下はすぐ地山となっていたため、遺物は奈良時代および平安時代の土師器片が数片出土したにとどまる。遺構は柱掘方と思われる小穴が 10 個検出されたにすぎない。

第25-12次調査 6 A E E-Y (山本宅地)

東海造機の西側の字楽殿の申請地で、幅 1.6 m のトレンチを南北に設定し 20 m² 調査した。検出した遺構は溝 3、柱掘方である。溝は S D 1606、S D 1607 が平安時代後半、S D 1605 が平安時代末にあたる。土壇はすべて新しい土取り穴である。なお、包含層から緑釉椀片が 1 点出土。

第25-13次調査 6 A F J-E (山内宅地)

広域圏道路東側の字西加座の申請地で幅 5.5 m の東西トレンチを設定し 60 m² 調査した。検出した遺構は溝 4、土壇 3 のみで建物はない。南端の東西に走る S D 1610 のみ奈良時代のもので他は平安時代末のものである。包含層から緑釉陶器椀片が 1 点出土した。



第15図 第25-10次 第25-11次 第25-12次 第25-13次遺構実測図 (1:200)

VIII 第 26 次 調 査

(県営圃場整備事業にともなう現状変更緊急調査)

第26次調査は斎宮地区県営圃場整備事業に関連する試掘調査と発掘調査で、4次にわたって実施している。このうち1次・2次・4次調査は、宮域外の水路部分の試掘であり、昭和54年度県営圃場整備事業にともなう発掘調査報告に登載予定のため、ここでは、宮域内南端部を東西に走る水路と道路部分について実施した第3次調査の報告にとどめる。

第26－3次調査 6AEV・W・X (鈴池地区)

調査区は宮城南限の水田部分で、県道斎宮・田丸線から西へ250mの間に設定し、幹線道路と排水路を含めた幅8m、1,890㎡の調査を実施した。

調査区は西から東へわずかに傾斜する。遺構検出面は表土下25cm～50cmの黒色及び黒褐色土の地山面で、西端で標高11m、東端で10.2m前後であった。包含層は西端では削平されており、東端部では約10cmであった。

調査の結果、検出した遺構は溝16条、土壇17、井戸1があり、その大半は中世後半から近世初頭に到るもので、平安時代のものは井戸1と土壇4が発見されただけである。

〔平安時代後半の遺構〕

井戸1 (SE1530)、土壇3 (SK1528、SK1529) がある。

SE1530は径2.6m×2.4mの円形に近い素掘井戸で、深さ1.1mまでは緩傾斜で狭まり、以下の底部は垂直に落ち込む断面を呈している。深さ2.25mで湧水多く、粘土の地山であった。底部は50cm×70cmの楕円形で非常に狭い。出土遺物は土師器の杯13、甕3、皿1、鉢1、灰釉陶器碗1等がある。杯は薄手で、厚手の小皿を伴わない。

SK1528は長径3.3m、深さ62cm。出土遺物は土師器甕2と少量の杯片にとどまる。

〔平安時代末の遺構〕

土壇4 (SK1510、SK1514、SK1527、SK1529) がある。

SK1510以外はいずれも不定形で、深さ10cm内外の浅い土壇で、遺物出土量も少ない。SK1327は土師器の台付小皿4、皿1、杯2と、灰釉陶器広口壺と山茶碗1が出土。皿と台付皿1にロクロ使用製品が混じる。SK1529は灰釉陶器皿1と土師器の小皿、高杯、甕の小片数点が出土した。他の2土壇にも同様の土器片が出土した。

SK1514は昭和50年のQトレンチ調査で東半を検出している。SK1510はSD36とSD34で西側を削平されるが、深さ37cmを測る。共にSK1529と同様の土師器片が出土した。

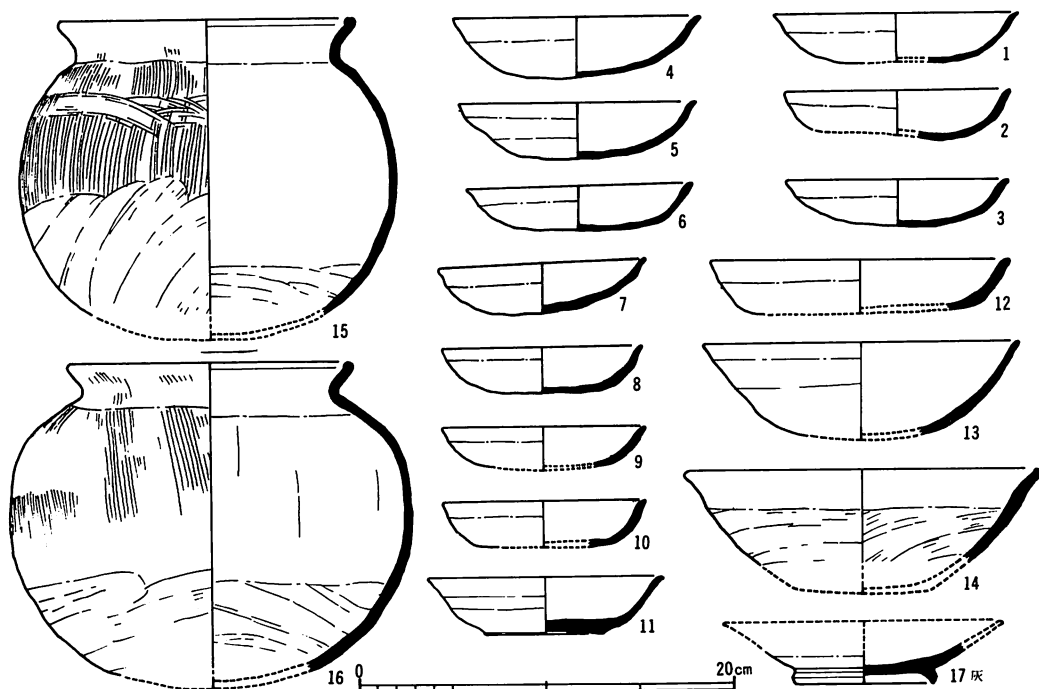
〔中世～近世初頭の遺構〕

溝16条、土壇11がある。

溝はS D1504、S D1506、S D1507、S D1512、S D1513、S D1515、S D1516、S D1517、S D1518、S D1522、S D1524、S D1526、S D1534、S D1535、S D1538、S D1539があり、土壇はS K1508、S K1519、S K1520、S K1521、S K1523、S K1525、S K1537、S K1532、S K1533、S K1536がある。S D1515を中心に、これに伴うものや、同時期の溝や土壇であろう。

S D1515は調査区の東端から西端部にかけて延長 194mを認めた。幅1.2m～2.5m、深さ20cm～34cmで底部が平坦で、西端が東端より70cmほど高い溝である。壁面は北より南が緩く、2段になる部分もある。調査区は東で7°近く北へ偏るが、この溝も調査区に沿って東西に延び、一定間隔で南方へほぼ直交して分流する溝が9ヶ所に見られる。その間隔は、中央部の最も広い部分で37m、東端部では14m～16mであった。また、この溝から派生する小溝（S D1517、S D1522、S D1526）を伴う。なお、S D1515と同時期で関連するものと推定できるものに、S D1518、S D1524、S D1534、S D1535がある。いずれも深さ10cm～20cmまでの浅い溝である。

西端部のS D1504、S D1506、S D1507は共に関連し合う溝で、Qトレンチ調査で検出した



第17図 第26-3次出土遺物 S E1530

S D 1502、S D 1503に続き、更に東へのびS D 1515と北側でつながる可能性も強い。

S D 1512・S D 1513はきわめて浅い溝であるが、Qトレンチ調査との照合で調査区南側で合流することが明らかである。S D 1516もこれと並走しており、同質のものであろう。いずれも、北方でS D 1504、S D 1507に交わるものと推定される。

土壇では、S K 1537以外はいずれもS D 1515に関連するものと推定される。S K 1533、S K 1508以外は垂直に近い断面をもち、40cm～80cmと深いものが多い。

S K 1537は底部が西へ傾斜し、出土遺物もなく、時期、性格は不明であった。

出土遺物はS K 1515で整理箱1箱で、他はいずれも少量であった。S D 1515は山茶碗、ねり鉢、常滑鉢や甕、天目碗、すり鉢等の陶器類と土師器の鍋類が多く、少量ではあるが志野、有田系と推定される茶碗類が含まれる。

〔ま と め〕

Qトレンチ調査で検出したS D 1500、S D 1501は共に平安時代後半の溝である。S D 1500は真北へ44mのびて東西溝と交わる。S D 1501はこれに対応する東西溝で幅2mを測る。また、S D 1502を境に南側遺構検出面が20cmほど低くなると共に平安時代の遺構は少なくなる。これらの状況より、S D 1501は宮域の南限を限る溝であるものと推定されてきた。

一方、今次調査で検出した平安時代の遺構は少なく、分布にもかたよりが見られる。いずれも南方に張り出した畑地と水田との接点に当たっている。

調査区より南方の広い水田は、今もなお古代条里制の地割を良く残しており、S D 1515等の溝はN10°W前後に復元される斎宮条理の地割にきわめて近い方向であった。

これらの状況は現状の畑地と水田の境が古来より大きな改変がなかったことを想起させると共に、斎宮跡の南限の様子を示すものと判断される。S D 1515は中世以後の溝であるものの宮城南限の状況を把握する上で重要な意味をもつものと考えられる。

IX 調査事務所要覧

I 事業概要

- (1) 調査事業 22地区 11,526㎡
- ア、計画発掘調査事業 5地区 7,558㎡
- 第23次調査 下園地区 840㎡
- 第24次調査 西加座地区 992㎡
- 第27次調査 東裏地区 2,350㎡
- 第28次調査 柳原地区 1,420㎡
- 第29次調査 中町地区 1,956㎡
- イ、緊急発掘調査（個人住宅等新築）
- 第25—1次～13次調査 13地区 1,089㎡
- ウ、緊急発掘調査（県営圃場整備事業）
- 第26—1次～4次調査 4地区 2,879㎡

(2) 普及事業

ア、現地説明会の開催

- (ア) 第23次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和54年6月2日 午後1時
- 場所 明和町大字齋宮字下園地内
- 調査面積 840㎡
- 調査期間 5月15日～7月5日
- 参加人員 約300名
- (イ) 第24次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和54年8月5日 午前10時
- 場所 明和町大字齋宮字西加座地内
- 調査面積 992㎡
- 調査期間 7月5日～8月29日
- 参加人員 約150名

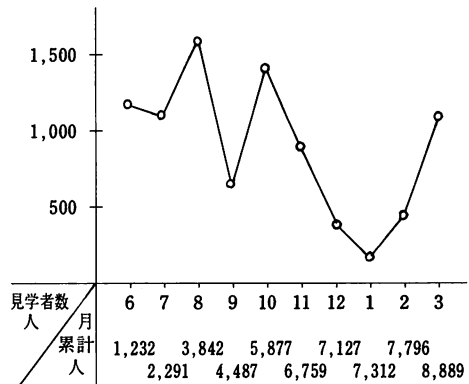
- (ウ) 第27次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和54年11月3日 午後2時
- 場所 明和町大字齋宮字東裏地内
- 調査面積 2,350㎡
- 調査期間 8月30日～11月26日
- 参加人員 約150名

- (エ) 第28次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和55年2月2日 午後2時
- 場所 明和町大字齋宮字柳原地内
- 調査面積 1,420㎡
- 調査期間 12月8日～3月12日
- 参加人員 約150名

(注) 第29次発掘調査はトレンチ試掘のため第28次発掘調査と併せて行う。

イ、調査報告会

- (ア) 5月13日 三重の自然と文化財を守る会（津支部）
- (イ) 10月24日 東海、北陸、近畿地区文化振興会議
- (ウ) 11月18日 三重の自然と文化財を守る会（伊勢支部）
- (エ) 11月30日 三重県私学社会科学研究会
- ウ、資料展示室見学者数



エ、その他

国史跡指定記念講演会

- 日時 昭和54年11月3日 午前10時
- 場所 明和町中央公民館
- 「王朝期の伊勢齋王について」
- 講師 作家 円地文子

II 予算

齋宮跡保存対策費 72,962千円

(単位千円)

事業名	区分	歳出	財源内訳		備考
			県費	国費	
発掘調査費		30,334	15,334	15,000	発掘面積 約8,000㎡
史跡公有化補助金		36,150	36,150	—	公有面積 約2.0ha
管理施設設置補助金		116	116	—	案内板等の設置
維持管理経費		6,062	6,062	—	資料展示室整備等
保存管理計画策定補助金		300	300	—	
計		72,962	57,962	15,000	

Ⅲ 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日
教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務(県立学校関係事務を除く。)を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。
- 二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。
- 三、その他斎宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月31日、教育委員会)
規則第6号抄

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

Ⅳ 職 員

職	氏 名	備 考
所 長	竹 林 日出夫	文化課主幹兼務
主 査	山 沢 義 貴	
事務職員	大 西 素 行	
"	倉 田 直 純	
技術職員	吉 水 康 夫	
事務補助員	野 呂 美絵子	
"	井 村 美重子	

Ⅴ そ の 他

(1) 斎宮跡調査事務所開所式

日時 昭和54年6月2日 午前10時

場所 三重県斎宮跡調査事務所

式次第 ア、あいさつ 県教育委員長
イ、経過報告 県教育長
ウ、来賓あいさつ

知事、県議会議長、文化庁、地元選出国會議員、明和町長

エ、テープカット

オ、来賓紹介及び祝電披露

カ、資料展示室及び発掘現場
見学

参加者 約 250名

(2) 斎宮跡調査指導委員

設置要綱

1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員(以下「委員」という。)を置く。

2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

- (1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。
- (2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。
- (3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。
- (4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。
- (5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3. 定 数 等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4. 任 期

任務が完了するまでの間とする。

5. 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6. 庶 務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7. そ の 他

この要綱に定めるもののほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附 則

この要綱は、昭和54年10月19日から施行する。

調査指導員

氏 名	専攻	現 職
福山 敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
坪井 清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇 禎二	古代史	京都府立大学教授
檜崎 彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
服部 貞蔵	考古学	(県)文化財保護審議会委員
久徳 高文	国文学	椋山女学園大学教授
渡辺 寛	古代史	皇学館大学助教授

委員会の開催

ア、第1回調査指導委員会

日時 昭和54年10月29日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

指導内容 54年度発掘調査について
—第23、24、27次調査—
55年度事業計画について
保存管理計画について
第27次調査現場視察

出席者 福山、坪井、門脇、檜崎、服部、
久徳、渡辺の各委員

イ、第2回調査指導委員会

日時 昭和55年2月4日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

指導内容 54年度発掘調査について
—第28、29次調査—
55年度事業計画について
土地公有化と環境整備について
第28、29次調査現場視察

出席者 福山、坪井、檜崎、久徳、
渡辺の各委員

(3) 環境整備担当者会議

日時 昭和55年1月31日～2月1日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

協議内容 掘立柱建物址の整備について
環境整備の問題点について
斎宮跡発掘調査現場視察

出席者 文化庁、奈良国立文化財研究所
並びに宮城、福井、広島、福岡、京都、滋賀、三重の各府県担当者26名



昭和54年度所内日誌

自 昭和54年4月1日
至 昭和55年3月31日

月 日	内 容
4月1日	三重県斎宮跡調査事務所 多気郡明和町大字斎宮に設置される
16日	斎宮跡対策委員会（常任委員会）……町中央公民館
24日	斎宮跡保存連絡調整会議……松阪地方振興事務所
24日	斎宮跡対策委員会（C地区小委員会）……町中央公民館
5月13日	「史跡斎宮跡について」山沢主査報告 三重の自然と文化財を守る会（津支部）
13日	斎宮跡対策委員会（C地区小委員会）……町中央公民館
15日	第23次発掘調査開始（下園地区）
6月2日	三重県斎宮跡調査事務所開所式
2日	第23次発掘調査 現地説明会
4日	斎宮跡対策委員会……町中央公民館
5日	第25—1次発掘調査開始（三重土地ホーム）
20日	第25—1次発掘調査完了
26日	県、市町村埋蔵文化財担当者会議 現地視察
7月5日	第23次発掘調査完了
5日	第24次発掘調査開始（西加座地区）
16日	竹川地区役員会
19日	第25—2次発掘調査開始（個人住宅）
24日	第26—1次発掘調査開始（県営圃場整備関連、中町地区）
25日	第26—1次発掘調査完了
28日	斎宮跡対策委員会……町中央公民館
8月3日	露越遺跡発掘調査指導（町幼稚園建設予定地）
3日	プレハブ棟（出土品整理所及び保管棟）移築入札
5日	第24次発掘調査現地説明会
6日	第25—3次発掘調査開始（個人住宅）
7日	斎宮跡対策委員会（常任委員会）……町中央公民館
7日	露越遺跡発掘調査指導完了
11日	第25—3次発掘調査完了
13日	第25—4次発掘調査開始（牛葉公民館）
14日	資料展示室見学者総数 3,000人となる
28日	斎宮跡対策委員会（土地交渉委員会）……町中央公民館
29日	第24次発掘調査完了
30日	第27次発掘調査開始（東裏地区）
31日	第25—4次発掘調査完了

月 日	内 容
9月4日	斎宮跡保存について打合せ 中勢南部県民局長他……………調査事務所
7日	斎王宮跡保存顕彰三重県議員連盟役員会……………調査事務所
10日	第25—5次発掘調査開始（個人住宅）
15日	第25—5次発掘調査完了
17日	斎宮跡対策委員会（土地交渉委員会）……………町中央公民館
25日	栗垣内地区発掘調査指導（広域圏道路建設予定地）
10月6日	斎宮寮研究会……………調査事務所
12日	第26—2次発掘調査開始（県営圃場整備関連 牛葉地区）
13日	資料展示室見学者総数 5,000人となる
13日	斎宮跡対策委員会（常任委員会）……………町中央公民館
16日	第25—6次発掘調査開始（個人住宅）
24日	「斎宮跡の現状と問題点」山沢主査報告 東海、北陸、近畿地区文化振興会議
27日	第26—2次発掘調査完了
29日	斎宮跡調査指導委員会……………調査事務所
31日	五大遺跡連絡会議……………広島県福山市
11月1日	第26—3次発掘調査開始（県営圃場整備関連 牛葉地区）
3日	国史跡指定記念公演会 講師 作家 円地文子……………町中央公民館
3日	第27次発掘調査現地説明会
5日	第25—6次発掘調査完了
18日	「斎宮跡発掘調査について」山沢主査報告 三重の自然と文化財を守る会(伊勢支部)
25日	斎宮跡対策委員会（土地交渉委員会）……………町中央公民館
26日	第27次発掘調査完了
26日	第26—4次発掘調査開始（県営圃場整備関連 竹川地区）
30日	斎宮跡対策委員会……………町中央公民館
30日	「斎宮跡の調査」山沢主査報告 三重県私学社会科学研究会
12月7日	第29次発掘調査開始（中町地区）
8日	第28次発掘調査開始（柳原地区）
12日	牛場地区全員集会……………牛葉集会所
12日	第26—3次発掘調査完了
19日	第25—7次発掘調査開始（個人住宅）
20日	栗垣内地区（広域圏道路建設予定地）発掘調査指導完了
24日	第25—7次発掘調査完了
1月9日	第25—8次発掘調査開始（個人住宅）
11日	第25—9次発掘調査開始（個人住宅）
18日	第25—8次発掘調査完了
24日	第25—10次発掘調査開始（個人住宅）

月 日	内 容
1 月 25 日	斎宮跡対策委員会……………町中央公民館
31 日	大規模遺跡環境整備担当者会議……………町中央公民館
2 月 2 日	第28次発掘調査現地説明会
2 日	第26—4 次発掘調査完了
4 日	斎宮跡調査指導委員会……………調査事務所
5 日	県、市町村埋蔵文化財担当者会議 現地視察
8 日	55年度予算 文化庁聴取
20 日	第25—11次発掘調査開始（個人住宅）
21 日	文化庁指導監査……………調査事務所
25 日	第25—12次発掘調査開始（個人住宅）
26 日	第25—10、11次発掘調査完了
28 日	斎宮跡案内板 2 基 松阪ライオンズクラブより寄贈
28 日	第25—13次発掘調査開始（個人住宅）
3 月 3 日	第25—12次発掘調査完了
5 日	斎宮跡保存管理計画策定委員会（文化庁・県・町・地元地権者他）……………町役場
5 日	第25—13次発掘調査完了
12 日	第28、29次発掘調査完了
14 日	斎王宮跡保存顕彰三重県議員連盟役員会……………津市
16 日	国際児童年記念 母と子の自然と歴史の散歩道「斎宮跡の道」開設
24 日	宮跡保存打合せ 県・町・三交不動産KK……………町役場

掘立柱建物一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第23次調査（6 A E L－B）

1160	(3)×2	E2°N	—	5.1	2.3	2.55	平安前	
1170	4×2	N4°W	11.8	5.9	2.95	2.95	〃	S K1177より古い
1149	3×2	E3°N	6.0	4.1	2.0	2.05	平安中	
1150	5×2	E3°N	12.1	4.8	2.42	2.4	〃	S B1160より新しい
1155	3×2	E2°N	5.6	3.9	1.87	1.95	〃	S B1164より新しい
1163	3×2	E0°	5.9	4.0	1.97	2.0	〃	S B1164より新しい
1164	3×2	E3°N	6.1	3.8	2.03	1.9	〃	
1180	(5)×2	E3°N	—	4.6	2.2	2.3	〃	
1185	3×2	E2°N	5.7	4.2	1.9	2.1	〃	S K1183より新しい
1148	5×2	E1°N	10.0	3.9	2.0	1.95	平安後	
1158	3×2	N0°	5.5	3.6	1.83	1.8	〃	
1171	(3)×2	E1°S	—	4.6	2.2	2.3	〃	
1178	4×(2)	N4°W	8.2	—	2.05	—	〃	S B1180より新しい
1142	3×2	N3°E	6.5	4.1	2.2	2.05	平安末	
1144	(3)×2	E2°S	—	3.9	2.1	1.95	〃	
1145	3×2	E3°S	7.0	4.1	2.33	2.05	〃	
1146	(3)×2	N4°W	—	4.2	2.0	2.1	〃	
1147	5×2	E1°S	9.2	3.7	1.84	1.85	〃	
1173	(2)×3	E2°N	—	5.8	2.0	1.95	時期不明	南面廂 廂柱間1.95m
1176	(2)×2	E0°	—	4.2	2.2	2.1	〃	
1175	—×2	E3°N	—	3.9	—	1.95	〃	
1186	(4)×—	E6°N	—	—	2.3	—	〃	

第24次調査（6 A G F－D）

1200	5×2	E3°N	12.0	5.0	2.4	2.5	平安前	
1201	(2)×(2)	N1°W	—	—	2.5	2.2	〃	
1209	(4)×2	E1°N	—	4.8	1.9	2.4	〃	
1210	(4)×2	E4°N	—	5.4	2.7	2.7	〃	
1211	4×—	E2°N	6.8	—	1.7	—	〃	
1213	3×2	E3°N	6.3	4.2	2.1	2.1	〃	S B1220より古い
1218	3×2	E6°N	5.7	4.2	1.9	2.1	〃	
1219	3×2	E6°N	6.0	4.0	2.0	2.0	〃	S B1220より新しい
1220	3×2	E3°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	S B1219より古い
1230	3×2	N3°W	7.2	4.0	2.4	2.0	〃	S B1228より古い
1202	(3)×2	E1°S	—	4.2	2.0	2.1	平安中	
1221	3×2	E1°S	5.4	3.6	1.8	1.8	〃	
1228	3×2	N1°E	5.7	3.6	1.9	1.8	〃	S B1230より新しい
1229	3×2	E3°N	4.95	3.8	1.65	1.9	〃	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第27次調査（6 A C G - S ・ T）

1246	4 × 2	N29° E	8.1	4.1	2.0	2.05	奈 良	
1250	3 × 2	N25° E	5.3	3.4	1.77	1.7	"	
1253	(3) × 2	E0°	—	3.5	1.2	1.75	"	総 柱
1257	(3) × —	N11° E	—	—	1.85	—	"	
1258	(3) × —	N8° E	—	—	2.1	—	"	S B 1257より新しい
1264	3 × 3	E20° S	6.9	6.5	2.3	2.17	"	総 柱
1272	3 × 2	E7° N	3.6	3.2	1.2	1.6	"	総 柱
1269	2 × 2	N2° E	3.4	3.4	1.7	1.7	"	総 柱
1270	3 × 2	E3° N	4.4	3.6	1.47	1.8	"	総 柱

第28次調査（6 A E O - D）

1041	4 × 2	E7° N	9.2	4.0	2.3	2.0	平安前	S B 1042より新しい
1042	4 × 2	E3° N	9.5	4.8	2.38	2.4	"	
1077	3 × 2	E2° N	7.2	4.1	2.4	2.05	"	S B 1390より新しい
1301	4 × —	E3° N	9.6	—	2.4	—	"	
1325	5 × 2	E4° N	10.6	4.9	2.15	2.45	"	
1390	3 × 2	E2° N	6.0	3.6	2.0	1.8	"	S B 1042より新しい
1391	(2) × (2)	E0°	—	—	1.8	1.8	"	
1302	4 × —	E3° N	9.5	—	2.38	—	平安中	
1306	3 × 2	N0°	5.7	4.0	1.9	2.0	"	S K 1297より古い
1307	3 × 2	N0°	5.8	4.0	1.93	2.0	"	
1310	5 × 2	E2° N	12.3	4.8	2.46	2.4	"	S B 1320より新しい
1315	5 × 2	E1° N	11.7	4.4	2.34	2.2	"	S B 1321より新しい
1318	4 × 2	E3° N	9.6	4.7	2.4	2.35	"	平安前か？
1320	5 × 2	E2° N	10.4	4.2	2.08	2.1	"	S B 1315より新しい
1321	3 × 2	E1° N	5.5	3.6	1.83	1.8	"	S B 1318より新しい
1360	3 × 2	E8° N	5.3	3.5	1.77	1.75	"	
1380	3 × 2	E6° N	5.7	3.9	1.9	1.95	"	
1394	3 × 2	E7° N	5.5	4.0	1.83	2.0	"	
1330	5 × 2	E6° N	9.9	3.9	1.98	1.95	平安後	
1333	3 × 2	E7° N	6.0	3.9	2.0	1.95	"	
1334	3 × 2	E7° N	6.0	3.9	2.0	1.95	"	
1340	5 × 2	E2° N	9.6	4.4	1.92	2.2	"	
1350	3 × 2	N5° W	5.8	4.4	1.93	2.2	"	
1373	3 × 2	E5° S	5.5	3.9	1.83	1.95	"	
1386	(3) × 2	E2° N	—	3.9	—	1.8	"	
1393	5 × 2	E4° N	9.9	4.2	1.98	2.1	"	
1396	3 × 2	E7° S	5.7	3.9	1.9	1.95	"	
1389	3 × 2	E4° N	5.5	3.8	1.83	1.9	時期不明	
1392	— × (2)	E0°	—	—	—	2.2	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第29次（中町トレンチ）調査（6 A F I - A）

1400	5×-	N4°W	9.75	—	1.95	—	平安中	
1401	3×-	N0°	5.7	—	1.9	—	〃	

第29次（中町トレンチ）調査（6 A F L）

1428	-×-	N4°W	—	—	—	—	平安中	S B1430より新しい
1430	5×-	E4°N	12.0	—	2.4	—	〃	
1431	(2)×2	N2°W	—	3.8	1.8	1.9	平安後	
1411	-×-	N5°W	—	—	2.8	—	時期不明	
1421	3×-	E0°	7.2	—	2.4	—	〃	
1427	-×-	N4°W	—	—	—	—	〃	

第29次（中町トレンチ）調査（6 A F K - F）

1436	-×2	E1°N	—	5.0	2.45	2.5	平安前	S B1438より新しい
1437	(2)×2	E2°N	—	4.8	2.0	2.4	〃	
1438	-×2	E4°N	—	4.2	—	2.1	〃	
1439	-×2	E1°S	—	4.6	—	2.3	〃	S B1442より新しい
1440	(2)×2	E4°N	—	5.0	—	2.5	〃	
1442	-×2	E4°N	—	4.0	—	2.0	〃	
1434	-×2	E5°N	—	5.2	—	2.6	平安中	S B1440より新しい
1441	-×2	E4°N	—	5.0	2.5	2.5	〃	
1446	-×2	E1°N	—	3.8	—	1.9	〃	
1435	3×(2)	N1°W	8.4	—	2.8	2.2	平安後	S B1434より新しい

第29次（中町トレンチ）調査（6 A G J）

1468	-×2	N3°W	—	4.6	—	2.3	平安前	S B1468より新しい
1467	(2)×2	N6°W	—	3.2	1.9	1.6	平安中	
1469	-×2	N6°W	—	4.8	—	2.4	〃	
1470	5×(2)	E1°N	9.0	—	1.8	1.8	平安末	
1472	-×2	N2°W	—	3.6	—	1.8	〃	

第29次（中町トレンチ）調査（6 A G K）

1488	3×-	E1°S	7.2	—	2.4	—	平安末	
1489	3×(2)	E1°S	6.6	—	2.2	1.7	〃	

第25-1次調査（6 A D P - K）

1540	(2)×-	N1°W	—	—	—	—	奈 良	
------	-------	------	---	---	---	---	-----	--

第25-4次調査（6 A E R - H）

1560	-×(3)	N2°W	—	—	—	2.4	平 安	東面廂か？廂柱間 2.5m
------	-------	------	---	---	---	-----	-----	---------------

第25-6次調査（6 A F H - A）

1630	3×2	N2°W	5.5	3.9	1.83	1.95	平安前	
------	-----	------	-----	-----	------	------	-----	--

第25-10次調査（6 A E V - A）

1599	(3)×-	E1°N	—	—	2.2	—	平安前	
------	-------	------	---	---	-----	---	-----	--

竪穴住居一覽表

第27次調査 (6 A C G - S, T)

S	B	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	かまど	時 期	備 考
1247		3.9×2.9	N 23° E	17			奈 良	
1249		(3.4)×—	N 27° E	7			"	
1259		4.0×—	N 9° E	10	○		"	
1260		6.0×5.5	E 4° S	8	○	北壁	"	
1261		3.0×—	N 9° E	12		東壁	"	周溝、貯蔵穴をもつ。
1266		4.8×3.5	E 32° S	8			"	
1275		3.0×2.9	N 6° W	12			"	
1282		—×—	N 7° E	10			"	
1262		—×—	—	17		東壁	"	

斎宮跡発掘次数一覽表

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	45	試掘	9-7	50	Wトレンチ
2	46	古里A地区	9-8	"	Xトレンチ
3	"	" B地区	9-9	"	Yトレンチ
4	47	" C地区	9-10	"	Zトレンチ
5	48	" D地区	10	"	広域圏道路
6-1	"	Aトレンチ	11-1	"	西加座2661-1 (山中宅)
6-2	"	Bトレンチ	11-2	"	" 2681-1 (山名宅)
6-3	"	Cトレンチ	11-3	"	東前沖2483-2 (前田宅)
6-4	"	Dトレンチ	11-4	"	下 園2926-9 (吉木宅)
6-5	"	Eトレンチ	12-1	51	2 Aトレンチ
7	49	古里E地区	12-2	"	2 Bトレンチ
8-1	"	Fトレンチ	12-3	"	2 Cトレンチ
8-2	"	Gトレンチ	12-4	"	2 Dトレンチ
8-3	"	Hトレンチ	13-1	"	東加座2436-7 (浜口宅)
8-4	"	Iトレンチ	13-2	"	" 2436-4 (中村宅)
8-5	"	Jトレンチ	13-3	"	古 里3283 (村上宅)
8-6	"	Kトレンチ	13-4	"	樂 殿2916~2917 (松井宅)
8-7	"	Lトレンチ	13-5	"	御 館2974-1 (川本宅)
8-8	"	Mトレンチ	13-6	"	中垣内 375-1 (南宅)
8-9	"	Nトレンチ	13-7	"	東 裏 328 (小川宅)
8-10	"	Oトレンチ	13-8	"	西加座2771-1 (細井繁久宅)
8-11	"	Pトレンチ	13-9	"	" 2773 (細井國太郎宅)
9-1	50	Qトレンチ	13-10	"	東裏363-1、362-1 (児島宅)
9-2	"	Rトレンチ	13-11	"	西加座2681-1 (浮田宅)
9-3	"	Sトレンチ	13-12	"	" 2721-3、2724-2 (森川宅)
9-4	"	Tトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2 (宮下宅)
9-5	"	Uトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
9-6	"	Vトレンチ	14-2	"	2 Fトレンチ

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
14-3	52	2 G トレンチ	21-7	53	6AFE-F(東前沖2631-1鈴木宅)
14-4	"	2 H トレンチ	21-8	"	6AEG-A(楽殿2909-3大西宅)
14-5	"	2 I トレンチ	21-9	"	6AED-R(篠林3218-3宇田宅)
15	"	齋宮小学校	22-1	"	6 A G U
16-1	"	竹川町道A	22-2	"	6 A G U
16-2	"	" B	22-3	"	6 A G W
16-3	"	" C	23	54	6 A E L-B(下園)
16-4	"	" D	24	"	6 A G F-D(西加座)
16-5	"	" E	25-1	"	6ADP-K(牛葉3029-1、三重土地ホーム)
16-6	"	" F	25-2	"	6ACA-Y(古里3270、脇田宅)
17-1	"	竹神社社務所	25-3	"	6ADD-F(篠林3139-3、池田宅)
17-2	"	竹神社防火用水	25-4	"	6AER-H(牛葉3014、牛葉公民館)
17-3	"	西加座2721-6(西沢宅)	25-5	"	6AGN-H(鍛冶山2392、丸山宅)
17-4	"	楽 殿2894-1(中川宅)	25-6	"	6AFH-A(西加座2675-5、谷口宅)
17-5	"	" 2895-1(西口宅)	25-7	"	6AEK-V(下園2926-10、奥田宅)
17-6	"	出在家3237-3(吉川宅)	25-8	"	6AFC-D(西前沖2064-5、山本宅)
17-7	"	" 3237-1(里中宅)	25-9	"	6ACN-C(広頭3387-1、北出宅)
17-8	"	楽 殿2894-1(西村宅)	25-10	"	6AEV-A(鈴池339-1、永島宅)
17-9	"	東海造機	25-11	"	6ACF-B(東裏364-1、沢宅)
18	53	6 A E L-E・I(下園)	25-12	"	6AEE-Y(楽殿2892-3、山本宅)
19	"	6 A E N-M・N・O(御館)	25-13	"	6AFJ-E(西加座2766-1、山内宅)
20	"	6 A E O-I・J(柳原)	26-1	"	6 A F R(中西)
21-1	"	6AGN-B(鍛冶山、中山宅)	26-2	"	6AEX~6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)
21-2	"	6AFI-D(西加座 ²⁷¹¹ / ₂₇₁₇ -2他山路宅)	26-3	"	6 A E V・W・X(鈴池)
21-3	"	6AFD-D(西前沖 ²⁶⁴⁹ / ₂₆₄₉ -1大西宅)	26-4	"	6 A C R(木葉山・南裏)
21-4	"	6AFH-F(西加座 ²⁶⁷⁸ / ₂₆₇₉ -3森下宅)	27	"	6 A C G-S・T(東裏)
21-5	"	6AGD-K(東前沖、渡部宅)	28	"	6 A E O-D(柳原)
21-6	"	6ACA-T(古里3269-2、中西宅)	29	"	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ、

三重県遺跡標示一覧

時 代		種 別		地 区	
0		A 国 郡 衙	K 北 勢	T 伊 勢	城
1	先 縄 文	B 伊 勢 寺	L 中 勢	U 志 摩 熊 野	砦
2	縄 文	C 志 摩 熊 野	M 南 勢	V 伊 賀	館
3	弥 生	D 伊 賀 院	N 志 摩	W 記 念 物	
4	古 墳	E 北 勢 集	O 熊 野 墓	X 交 通	
5	飛 鳥	F 中 勢 落	P 伊 賀	Y	
6	奈 良	G 南 勢	Q 伊 勢	Z そ の 他	
7	平 安	H 志 摩	R 志 摩 熊 野		
8	鎌 倉	I 熊 野	S 伊 賀		
9	室 町 以 降	J 伊 賀			

齋宮跡地区表示

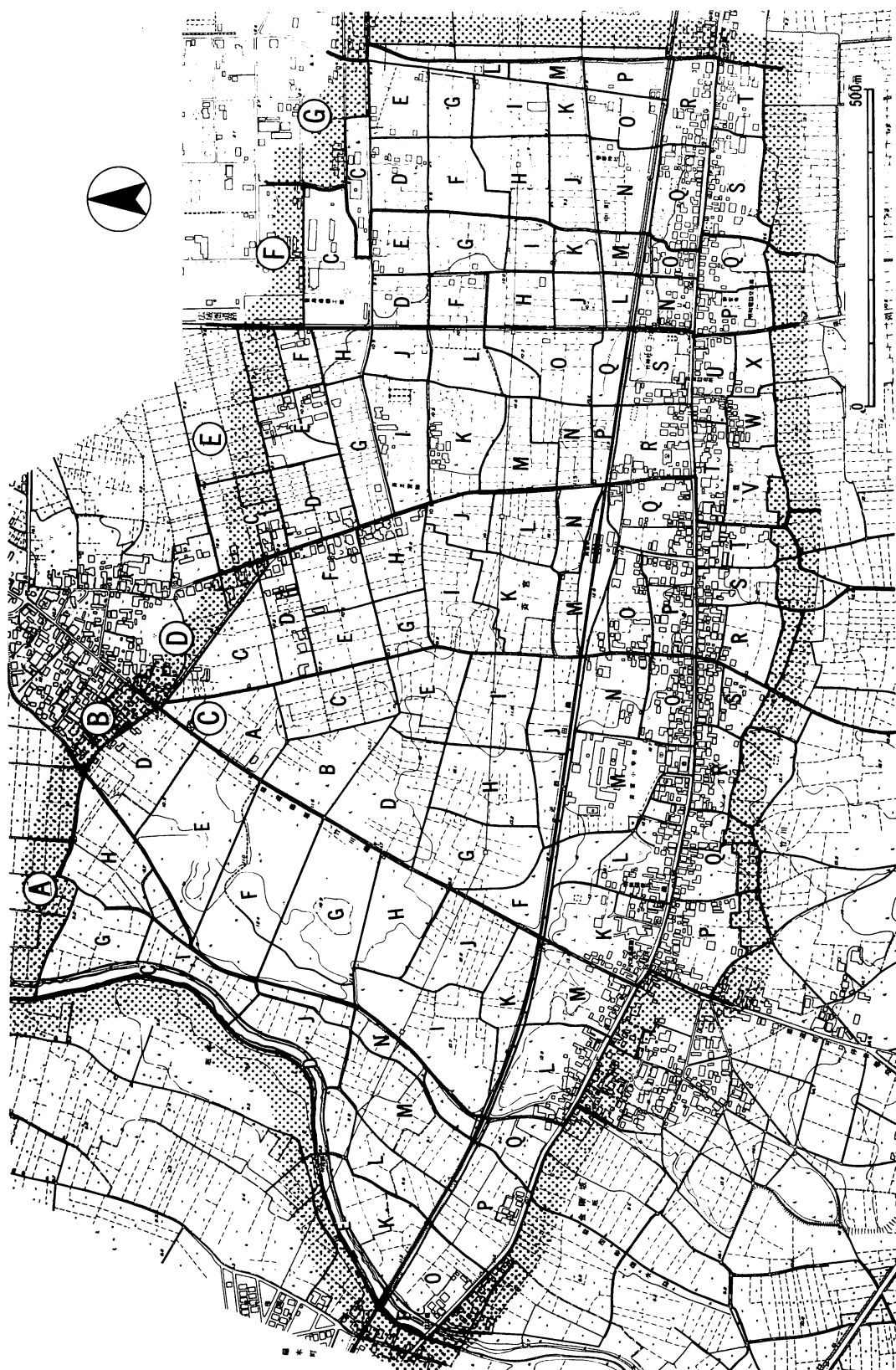


図 版



全 景 (北から)



SB1155 SB1163 SB1164 (西から)



S B 1150 S B 1155 (西から)



S B 1160 S D 1140 (西から)



S D1140 S B1176 S B1175 (南から)



S B1180 S B1185 S K1183 (東から)



全 景 （北から）



S B 1213 （西から）



S B 1228 S B 1229 S B 1230 (西から)



S B 1218 S B 1219 S B 1220 (北から)



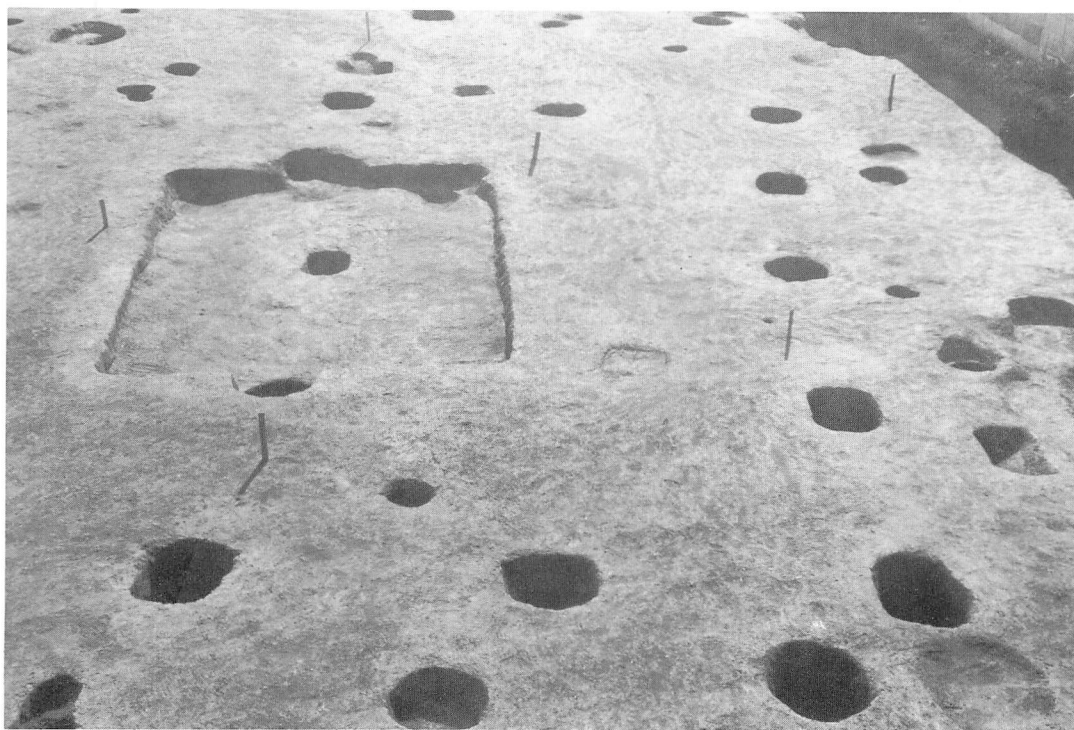
S B 1230 S B 1229 (北から)



S B 1221 (西から)



全 景 （北から）



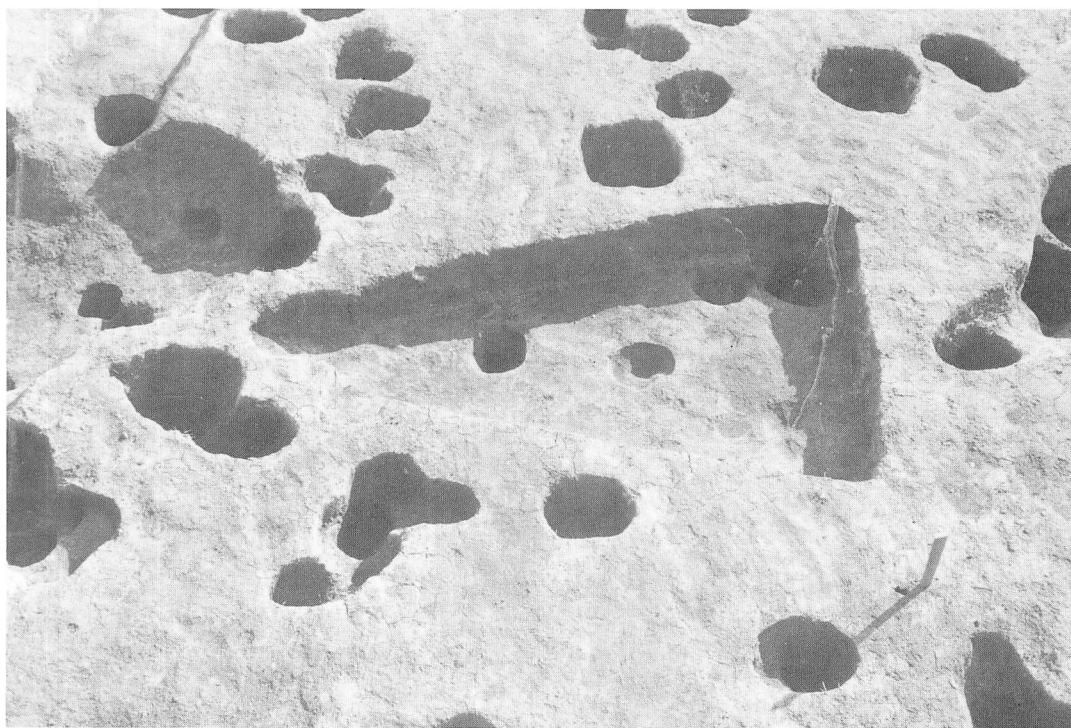
S B1247 S B1246 （北から）



S B 1250 (北から)



S B 1260 (北から)



S F 1263 (北から)



S B 1269 S B 1270 (北から)



全 景 （西から）



S B 1306 S B 1307 S D 1300 （北から）



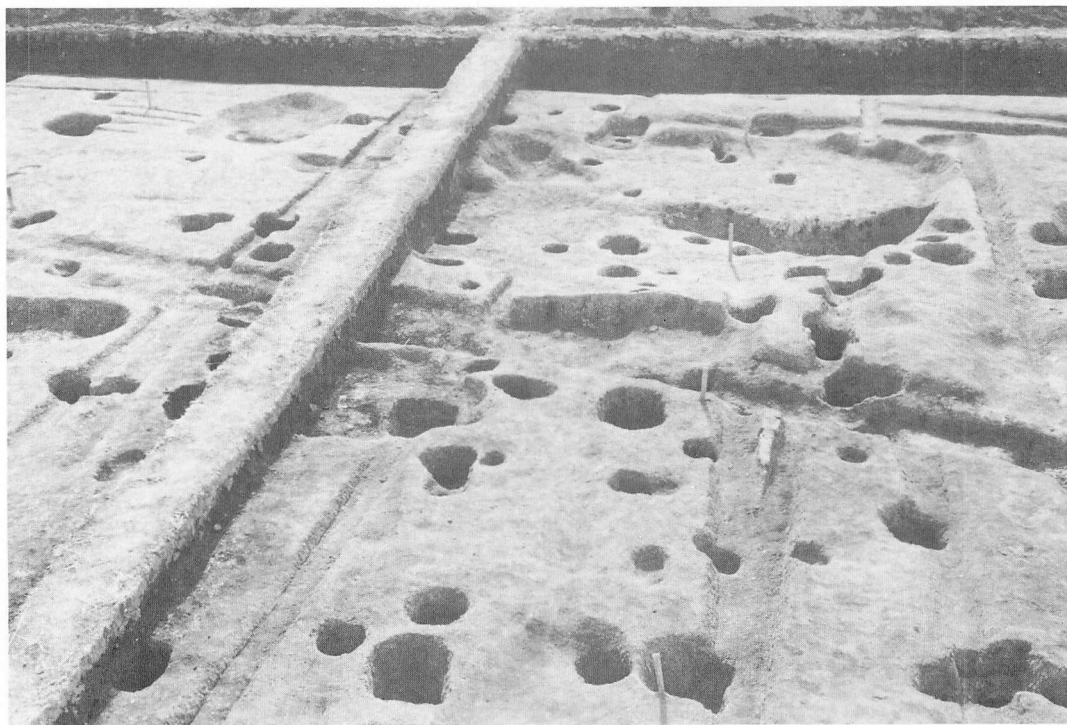
S B1315 S B1320 (西から)



S B1318 S B1322 (東から)



S B1330 S K1347 S D1332 (東から)



S B1360 S B1327 (北から)



S B1373 (東から)



S B1393 S D1327 (東から)



6 AFMトレンチ (北から)



6 AFL-Bトレンチ SK1425 (東から)



6AFI-Aトレンチ (北から)



6AFK-Fトレンチ (北から)



6AFMトレンチ（北から）



6AFK-Lトレンチ（東から）



6 AGJ トレンチ (東から)



6 AGK-F トレンチ SE1490 (東から)



第25-1次調査 (西から)



第25-2次調査 (西から)



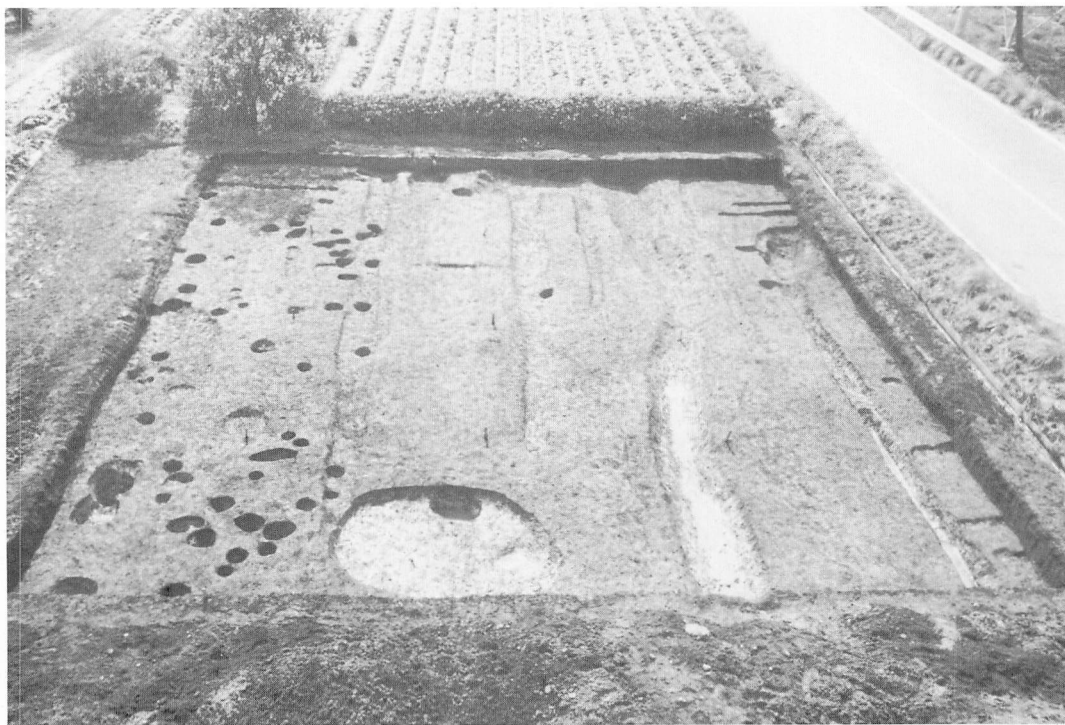
第25-3次調査 (北から)



第25-4次調査 (西から)



第25-5次調査 (東から)



第25-6次調査 (北から)



第25－7次調査（北から）



第25－8次調査（東から）



第25-9次調査 (南から)



第25-10次調査 (北から)



第25-11次調査 (北から)



第25-12次調査 (北から)



第25-13次調査 (西から)



第26-3次調査 6 A E X 全景 (東から)



6 AEW全景 (東から)



SE1530 (東から)

三重県齋宮跡調査事務所年報1979

史 跡 齋 宮 跡

— 発掘調査概報 —

昭和 55 年 3 月 31 日

編集発行 三重県齋宮跡調査事務所

印 刷 光 出 版 印 刷
